鉄のストラトス

ルーク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鉄のストラトス

【Ｎコード】
Ｎ８４１０Ｓ

【作者名】
ルーク

【あらすじ】
時空の狭間に呑み込まれるのを覚悟の上で、世界を護った少年――早瀬浩一。彼はささいな事がきっかけで、生まれ育った世界とは違う発展を遂げた地球へとたどり着く。彼はその世界で、己が正義を貫けるのか――？

これはアニメ版『鉄のラインバレル』と『ＩＳ　〈インフィニット・ストラトス〉』のクロス小説です。ＩＳ世界が舞台で、原作で描写されていないキャラの心情の一部分等に関しては独自解釈が含まれ

ており、その他にも他作品のネタが含まれていますが、読んでくれた皆様が楽しんで頂けると嬉しいです。感想や誤字指摘、その他の指摘等お待ちしてます。

ＰＶ３７０００・ユニーク８６００アクセス突破、感謝です。

第００話　プロローグ（前書き）

いよっし！　やるぞー！！

第００話　プロローグ

光の剣を携え、輝く本流をその背に受けて、紅い鉄（くろがね）の鬼が、稲妻が乱れ飛ぶ重力変異の渦を突き進む。

操縦桿を握る早瀬浩一は、過去も現在も未来も、己が生涯の炎を全て注ぎ込むかの様な気迫で、ラインバレルを駆る。

溢れんばかりのこのエネルギーは、仲間達がくれたものだ。

――――私の全てを、浩一君にあげる！！

――――どうせ、一度は無くした命だ！　これで皆を護れるなら、惜しくないさ！！

――――命を力に、か……！！　ホントにヒーローみたいで、カッコイイっスね！！

――――大丈夫だよ、姉さん……！　早瀬さんなら……絶対に、やりとげてくれるから……！！

――――……うん……！

――――さあ、皆、もうひと踏ん張りだ！！　これが終わったら、全員笑顔で、南の島に行こうぜ！！

――――久嵩と石神社長が護ろうとしたこの世界を護ってくれ……！　彼らがそうであったように……私も、お前が正義の味方である事を望む！！

――――早瀬浩一、道は我々が切り開こう。後は頼むぞ、正義の味方。

美海、矢島、山下、イズナ、シズナ、道明寺、森次さん――地上にいる理沙子達、レイチェル達ＪＵＤＡ特務室の仲間、加藤機関の奴ら、生きたいと望むこの世界の人達。
死んでいった社長、加藤久嵩、ジュディ達米軍の連中、城崎の親父――皆が託した願いを乗せたこの一撃は、絶対にしくじる訳にはいかない。

皆が護りたかったこの世界を――――絶対に護る！

（見えた……！）

内に正双四角錐を抱えた、黒い球体――ハブ・ダイナモ。
あれをエグゼキューターで断ち斬れば、全てが終わる。

多分、自分の命も。少なくとも、もう帰ってはこれない。

それでも構わなかった。

「ぐッ……！！」

重力変異の中心に近づいたせいか、より一層激しい振動が襲った。
身を屈めて衝撃を堪える浩一の視界に、一人の少女の姿が映る。

――城崎絵美。

必ず、誰よりも上手くラインバレルを扱える様になって、護ってみせると約束して、護れなかった――

（……っ！）
一瞬、自分が今命がけで世界を救おうとしているのは、単なる彼女を喪った事による自暴自棄（ヤケ）に過ぎないのではないか、という考えが頭を過ぎり――すぐにそれを打ち消した。

俺が今こうしているのは、俺がそうしたいからだ。
義務じゃない。命令じゃない。ヤケを起こしてなんかもいない。

正義の味方として、俺自身の意志で、この世界を救いたい――――！！

最後の力を振り絞る様な感覚。ハブ・ダイナモを確実にぶった斬れる距離まで、ただ真っ直ぐに向かう。

――城崎。

――――お前は護れなかったけど、それでも。

――――――俺はこの世界を、そこに生きる人達を護りたい。

――――――――それが俺の正義なんだ！！

「うあああああああああああああああああああああああああああああああッッッッッッッッ！！」

全てを込めた一振りが、黒い球体を切り裂き――

巨大な波が、紅い巨人を呑み込んだ。

「むむ……？」

機械の部品が散乱するケーブル樹海に鳴り響いた音により、その部屋の主は微睡みの内に沈もうとしていた己が意識を、現実世界に引き上げた。

幸運にもすぐ傍にあったガラクタの山に手をつっこみ、音源を引っ張り出す。

（んー、むー……）

睡眠不足で鈍る思考で、手にしたものが何だったかを思い出そうとする。

強く興味を惹かれる物ではない事だけは知っている以上、後一瞬でも思い出すのが遅れれば眠りに入っていただろう状況で、それがど

ういうものだったかが頭に浮かびあがった。

これは……

暇潰しで作った、次元間探査センサーからの索敵情報を受信した事を知らせ、その索敵対象物にこの世界の事象の蓋然性境界面と同じ次元振動波を付与し、この世界に誘導する為のコントローラーだ。

まさか反応するとは思わなかった。

索敵対象物の簡易データが、手にしたコントローラーに表示される。人間の肉体と比較しての大質量と、人型に近い形状からして――多分、巨大ロボット。

「WOO（うーー）……RYY（りいい）……」

妙な呻きを漏らして、スイッチを押した直後。その肉体は、強制的に睡眠を開始した。

――これら一連の動作は。

目が覚めた時には、もう記憶には無かった。

第００話　プロローグ（後書き）

いかがでしたでしょうか？
今作はアニメ版ラインバレルの２４話終了間際からのＩＦの話となります。
皆様の興味を誘う事が出来れば幸いです。次回は随時更新の設定集（ネタバレ注意）を書く予定。

設定（ネタバレ注意、最終更新１１／２０）（前書き）

ここでは作中の設定について随時書き込んでいきます。無論皆様に楽しんでもらう為になのですが、私のモチベーションアップも兼ねて。

ネタバレの危険ありなので、それを避けたい方はご注意下さい。

設定（ネタバレ注意、最終更新１１／２０）

Ｒ３３５『プロトタイプ・ラインバレル』

早瀬浩一専用機の第三世代型ＩＳ。待機状態は鉄色のネクタイピンで、ＩＳスーツ装着時は右腰に挟んで持ち歩いている。
何者かがマキナのラインバレルのブラックボックスに創り出していた拡張領域（パススロット）に初期設定の状態で量子変換（インストール）されており、浩一がこの機体を装着し、肉体が損傷していた絵美が拡張領域（パススロット）に量子変換（インストール）された状態で作中世界へと来訪した。

白い鬼の姿のラインバレルと違い、こちらは兜型ハイパーセンサーや鎧袖型肩部装甲によって黒い侍の様な出で立ちをしており、外見はセントラルの量産型マキナに近い。
だが全くの別機体という訳ではなく、両下腕部の鞘に納められたブレード、両腕部放熱フィン・両脚部放熱システム（＊１）など共通項がある。
オーバーライドをイメージ・インターフェイスで制御し、第三世代型兵器として扱う事をコンセプトとする近接格闘型のパワータイプであり、カウンターナノマシンも組み込まれているが（カラーリングが黒いのはこの為）、試作型の現段階ではオーバーライド共々性能が低い為、軽減出来る負担は小さく連続転送も不可能。

マキナ版ラインバレルに用いられていた超高度装甲システム（＊２）やＳシステム（＊４）の技術が使われており、従来の再生能力は健在。スキンアーマーだけでなくシールドバリアー残量の回復も早められている。
これは高速修復による防御面よりも、損傷によって機体性能が低下する事を防ぐ意味合いが強く、装備・能力の動作を常に安定させつ

つ、持久戦において大きなアドバンテージを獲得している。

コアは束の自作でなく男性である浩一が使用している点を考慮すると、現行ＩＳに使用されているものと同一ではない可能性があるが、これに関しては既存のコア同様ブラックボックスである為不明。浩一と絵美は、コアを含めたこの機体のデータをＩＳ学園に提供する見返りとして、それらが済み浩一の世界とのコンタクトが可能になり次第、交流としてそちらに送り返すという取引により身分を保証されている。

尚、現行の超兵器を凌駕する為に造られた対マキナ用マキナ”カウンター・マキナ”であるラインバレルの技術が使われている事から、潜在的に軍用ＩＳすら上回るスペックを持つ機体として創られた可能性があるが、現段階では単純な推測の域を出ていない。

＊1＝ラインバレルの太ももにある赤い格子状のパーツ。情報元はアニメ版ラインバレルＤＶＤ7巻の解説書。

＊2＝マキナの外部装甲に用いられている技術。金属性の硬度とある程度の柔軟性を合わせ持ち、尚且つ自己修復能力の妨げにならない。
ＩＳ版ラインバレルでは、高速修復の為にドレクスラーソイル（＊3）とのマッチングに使われている。

＊3＝自己増殖・修復機能を持つ、ファクターの体内にも内包されているマキナの固有ナノマシン。略称”Ｄソイル”。
厳密には、このＤソイルの集合体で出来ている素材及びそれを用いたシステム全体の事を指し、マキナは機体それ自体がＤソイルの塊である。

＊４＝マキナの装甲や本体構造、動力を維持する為のシステム。
半導体の素材に出来るカーボンナノチューブを機体各部に組み込み、その中空空間に内包したＤソイルを配列し集積回路として用いる事で、マキナの構造体丸ごとを骨格・動力部・コンピューターにしている。
マキナ版ラインバレルを解析した牧曰く、『ラインバレルの機関は他のマキナのＳシステムに酷似しており、出力が桁違い』との事。
ＩＳ版ラインバレルでは、Ｓシステムとリンクしたコアをカーボンナノチューブの代用とし、ファクターの体内は勿論、装甲やエネルギー・バイパスの他に、操縦者を包む皮膜装甲（スキンバリアー）にもＤソイルが配列されエネルギー循環を行っている。
言わば、ＩＳ版ラインバレルは機体そのものがコアであり、近接格闘用としてパワーと反応速度を中心にスペックが割り振られている。

・補足説明

プロトタイプ・ラインバレルに関しては、１６巻巻末の設定資料で”試作段階の時点で後のオーバードライブと呼べる機能が既に組み込まれていた”と記述され、１３巻巻末のアマガツ形態についての設定資料によると、原作のオーバードライブとは”連続転送、及びそれを使用する際機体色が黒く変化した状態を指す”との事です。
アニメ版ではプロトタイプ・ラインバレルは登場せず特に設定が決まっていないので、”オーバーライドとカウンターナノマシンが使えるものの、試作段階の為まだ性能が低い”という設定にさせて貰いました。
超高度装甲システム（情報元は、アニメ版をベースにしたＰＳＰゲ

ーム版）とＳシステム、Ｄソイルという呼称はアニメ版の設定です。

ファクターシステム

前述の通り、浩一と絵美の肉体にはＩＳ版ラインバレルと同型のＤソイルが内包されており、それによって二人は『ラインバレルというＩＳの一部』として扱われる。
故に後付武装（イコライザ）として拡張領域（パススロット）への量子変換（インストール）が可能であり、Ｓシステムを用いて情報処理を行う事が出来る。
拡張領域（パススロット）へ入っているファクターの情報はデータ化され、本人の視点からの映像や思考内容などが分かる記憶データを閲覧する事も可能であり、作中世界へ来たばかりの浩一・絵美の取り調べにも用いられた。

また、浩一と絵美は体内のＤソイルが同じ働きをする為に本来ＩＳスーツを必要としないのだが、”ファクターがＩＳスーツにどの様な影響を与えるのか”というデータ採取の為、学園側からスーツの着用を義務付けられている（浩一は一夏同様の全身型、絵美は一般的なレオタード型）。
緊急時はエネルギーを消費しない様、操縦者の運動性に支障が無ければＩＳ展開時に着ている服をそのまま残す場合もある。

・補足説明

本編での『Ｓシステムに比べたら、浩一の世界・作中世界の機材は玩具レベル』という記述は、原作漫画の１８巻１５５ページで、マキナの陽電子頭脳についてレイチェルが同様の発言をしていた事が

元ネタになっております。
アニメ版では描写が無い為、電脳が搭載されているかは不明。人工筋肉と人工血液はあるので、多分搭載されているかなとは思いますが……Ｓシステムがあるし、うーん。

近接ブレード《名称未設定》×２

両下腕部に取り付けられた鞘に納められた、ラインバレルの主力武装。

《オーバーライド》

マキナは遠く離れた位置に存在していようと、自身を呼び出したファクターの元へと一瞬で移動出来る。

これは移動元と移動先を繋いだ異空間を渡る事で行っており、通常はファクターが乗っている状態で実行する事は出来ないのだが、それを可能にするスペックを持つラインバレルがファクター搭乗のままリアルタイム転送を行う事を『オーバーライド』と呼称している。その際はファクターの身体に負担をかけてしまう為、それを軽減する為の『カウンターナノマシン』と呼称される特殊ナノマシンの起動により機体のカラーリングが黒く変色し、ＡＢＣで”二番目の”という意味のＢとＢＬＡＣＫ（ブラック）の頭文字から、レイチェルによって『ラインバレル　ｍｏｄｅ（モード）－Ｂ（ビー）』と名付けられた。

ＩＳ版ラインバレルでは、前述の通りイメージ・インターフェイスで操作しているが、要求されるスペックが並ではない為に第三世代型兵器としての量産化には向いておらず、高レベルＳシステムのハ

イパワーと処理能力、驚異的な再生能力による機体性能の維持があってこそ、実戦で扱う事が出来ている。

現段階では、ラインバレルのＩＳとしての稼働率がまだ低い為にイメージ・インターフェイスとのリンクが未完成であり、感情の昂りに応じて力が引き出されるＤソイルのシステムがそのまま使われている。

よって、操縦者である浩一の精神状態が高くならなければ作動しない動作不安定な状態にある。

テールスタビライザー

Ｓシステムの恩恵により、推進・姿勢保持を兼用する主要他方向推進装置（マルチスラスター）となっている。

迅雷

作中世界に来たばかりの浩一・絵美を襲撃した無人機ＩＳ。

頭部パーツの形状が、アニメ版『鉄のラインバレル』世界で新型アルマとして運用されていた迅雷と酷似している為、便宜上同名で呼称している。

襲撃した三機全てが浩一との戦闘で大破した為、製造した勢力とその理由及びアルマ版迅雷との関係性や、無人機としての操縦方法や機体の各部機構といったメカニズム等は明らかになっていない。

白色の二機は緑色に塗装された一機よりも高い性能を発揮しており、無人機として創られた為の弊害なのか、量産型故の簡易性によるものなのかは不明だが、絶対防御の発動は確認されなかった。

だが、操縦者への負担を考慮する必要が無い為か、それを補うには十分な高い運動能力と機動性を発揮している。

この機体の胸部・両脚部には、アパレシオンに用いられていた板状電磁迷彩補助ユニットが取り付けられており、使用した電磁迷彩は目視及びレーダー・熱源による探知が不可能であった。
また、使用頻度から考えて、使った武装は以下の様に推測されている。

初期装備（プリセット）

1：両脚部装甲にナイフシースごと一本ずつ収納されていた、対ＩＳ用と思しきナイフ
2：電圧によって低威力連射・高威力単射に切り替えられる短銃身（ショートバレル）のハンドレールガン（遠距離攻撃を担当していたのか、緑機は二丁使用していた）。

後付装備（イコライザ）

1：水色ラインの白色機が装備していた、スラスター底部に一本ずつマウントされた鞘に納められた太刀型近接ブレード
2：薄紫ラインの白色機が量子変換（インストール）していた、長刀型近接ブレード

・補足説明

１４巻カラーポスターに描かれている、三機の新型迅雷をＩＳ化しました。

形状としては、黒い全身ＩＳスーツの人型に頭部・胸部・両腕部・左部から右部までの腰部・両脚部の装甲を装着。

腹回りは白・緑の部分が金属板（プレート）として装着されて、黒い個所はＩＳスーツがむき出し。

原作にてラインバレルが核ミサイル阻止作戦で使った大型バッテリーユニットを小型化した様な腰背部は、甲龍のスラスターの様に両端がアームで左右の腰部装甲と接続され、両肩の四角い個所は二基の非固定浮遊部位（アンロックユニット）としてスラスターになっています。

武装の形状は、カラーポスターに描写されている物と同様です。

ハンドレールガンの低威力連射・高威力単射設定は、原作１３巻５７ページでラインバレル・アマガツの右腕を一発で吹っ飛ばした事、コミックス未収録の８２話で連弾が降り注いだシーンの二つの描写が元になっています。

第０１話　境界より来る者（前書き）

釋廉慎さんから頂けたアイディアにより、ようやく執筆する事が出来ました。
釋廉慎さん、本当にありがとうございました……

第０１話　境界より来る者

”十二ヵ国の軍事コンピューターが同時にハッキングされ、制御不能となった二三四一発のミサイルが、一斉に日本へ向けて発射された”。

それが混乱と絶望――――そして唖然を巻き起こした、異常な緊急事態の幕開けだった。

結論から言ってしまえば、手に負えない凶弾の群れは誰一人として人命を奪う事無く、無辜の民の財産を何一つとして壊さなかった。

その歴史的大事件は、たった一人の女性の手で阻止されたのである。

その場にいた全員が、皆が皆我が目を疑った。

バイザーが仮面の様に顔を隠している兜。

まるで鎧の如く腕部・腰部・脚部に装甲を纏い、その背部には一対の翼が独立して浮遊している。

薄手のスーツに身を包んだ胸部の膨らみから、黒髪の装着者が女性

である事が判別出来る。

手にするのは、たった一振りの大剣。

近代的・機械的なフォルムをしたそれら全てが、白銀色を主としてカラーリングされている。

それは正(まさ)しく、現世に蘇った白い騎士と呼ぶべき姿だった。

彼女はその刃を以って、千二二一発のミサイルを飛翔しつつ叩き斬るという、無茶苦茶な芸当をやってのけた。

それだけに留まらない。

突如として放出した光の粒子を、当時試作型でしかなかった大型荷電粒子砲と成し、放出された熱線が残りの半数を撃ち落としたのである。

超音速の飛行能力及び格闘能力、粒子からの物質構成能力、実用化されたビーム兵器――

これに匹敵する力は、現行兵器の中には存在しなかった。

世界は、空想の産物としか言い様が無い驚異にして脅威の存在を、ただ黙って見ていた訳ではない。

最新鋭機を数多く含めた偵察部隊が、それぞれ日本とその周辺各国の命を受けて現地へと向かった。

目標を分析し、可能ならば捕獲行動に入る。それが無理ならば撃滅する――

それが与えられた任務だったが、彼らは全く歯が立たなかった。

謎の白騎士は、目に見えないバリアーの様な物で全身を防御しており、ミサイルでもバルカンでも傷一つ付けられなかったのである。

更に、戦闘機には不可能な急速旋回を、その原因である急激なGを何の苦にもせず、気絶（ブラックアウト）どころか呼吸困難にすらなっていないかの様に、楽々とこなす機動力。

人間とは思えない判断力と実行力、それを実現させる高速思考。

加えて、圧倒的な力の差を証明するかの様に、部隊員は一人も死ななかった。

彼女には、実戦で相手を生かしたまま無力化させる程の余裕があったのだ。

それでも世界は諦めず、躍起になって部隊を投入したが、更なる性能を見せつけられた。

まるで幻の様に、日没と共に忽然と姿を消されたのである。

レーダーでも目視でも見つけられないステルス能力が駄目押しとな

り、世界は完膚なきまでに敗北した。
ミサイル二三四一発、戦闘機二百七機、巡洋艦七隻、空母五隻を撃破。監視衛星八基を無力化――
たった一機で各国の軍事力を凌駕する、究極の機動兵器。
世界はその名を知ってはいた。

『インフィニット・ストラトス』――略称”ＩＳ（アイエス）”。

全ての現行兵器を凌駕する、ＩＳを倒せるのはＩＳだけ――
『白騎士事件』と呼ばれる一連の騒動が起きる一ヶ月前は、開発者の篠ノ之束博士が行った発表を誰も信じず、その成果を認められなかった、宇宙空間での運用を目的としたマルチフォーム・スーツ。
その力を、各国は否応なく受け入れざるを得なかった。
開発国として独占的に技術を保有している日本に危機感を募らせた諸外国の手で、ＩＳの運用を制限する為の協定『アラスカ条約』が締結。
情報の開示と共有が義務付けられ、戦争行為への利用は禁止となり

――

――そうして、十年の歳月が過ぎ去っていた。

ＲＲ－０８『ラファール・リヴァイヴ』――フランスのデュノア社が開発した、第二世代型のＩＳである。

この機体の特筆すべき点は操縦の簡易性にあり、それによって操縦者に左右されない安定した性能を発揮する事が出来る。

更に使える武装と、機体の性能・性質を変更して様々な状況に対応

する為の一式装備『パッケージ』の種類が豊富であり、格闘型・射撃型・防御型と全タイプに変更する事による多様性役割切り替え（マルチロール・チェンジ）を実現させていた。
それらを開発する第三者団体（サードパーティー）（ゲーム機で例えると、本体で使用する為のソフトウェアを制作している会社の事である）が多く参入している事でも知られている。

加えて元々のスペックも、初期開発の機体ならば、一世代上の第三世代型にも引けを取らない。

これらの点が高く評価された結果、第二世代型では遅れに遅れて登場した最後発の機体でありながら、量産型ＩＳとしての市場占有率（シェア）は現在世界で三位。

十二ヵ国で正式作用され、許可料（ロイヤリティ）を払ってのライセンス生産も七ヵ国で行われている。

基本タイプは全距離対応射撃型で、山田真耶の手には現在、クラウス社製実弾銃器の五十一口径アサルトライフル《レッドバレット》が握られていた。
抜ける様な青空の下で、火薬銃の乾いた音が響く。

その度に破壊される射撃ターゲットも、止まっている訳ではない。
直径二百メートルの第3アリーナを縦横無尽に動き回り、その上連射銃撃まで行ってくる。

それに対処するのは、機械の部品（パーツ）を身に着けた、自由自在に空を飛ぶ人間――

この場では珍しくないが、ヘリコプターの回転翼（ローター）や飛行機のエンジンによる揚力も無しで飛行し、尚且つ飛び交う弾丸を躱し防ぐという、１０年前までならば夢想でしかなかった光景は、長年生きている者には今尚信じられないかもしれない。

ＩＳは慣性制御機能（パッシブ・イナーシャル・キャンセラー）――略称ＰＩＣというシステムで加速・停止・浮遊を行うのだが、これは基本的に、その場でホバリングをするかの様に”浮く”為の機能である。
機体の推進は、多くのＩＳ脚部に搭載されているブースターを吹かすか、ＰＩＣを使用した一種の反重力システムであるスラスターの出力展開領域を操作するかして行う。

また、操縦者はハイパーセンサーから送られてくる情報により、自身の周り３６０度全方位を視認する感覚で把握し、処理能力はコンピューター以上となる。

真耶はそれら二つを駆使して射線と弾道を先読みし、背部の翼型多方向推進装置（ルチスラスター）を操り、まるで泳ぐかの様に宙を舞う。

四方八方からの集中砲火を網の目を掻い潜る様に回避しつつ、《レッドバレット》を単発で発砲。
寸分違わず中央に吸い込まれた弾丸が、射撃ターゲットを次々と破砕していく。

「――！」

次いで左方から来る弾幕を、そちらに目を向けずに回避不能と判断。左肩を弾雨の前に突き出し、両肩部ユニットの物理シールドで防御して対処する。

そのまま右腕で射手複数を狙い撃ち、そこに生じた包囲網の穴を急加速で抜けて、浴びたくもない敵弾のシャワーを突破。

急上昇しつつ、その勢いのままに逆上がりの要領で上下反転して射撃、残りを撃ち落としていく。

「精が出るな、山田先生」

最後の一基を撃墜した所で通信が届く。

真耶が二百メートル上空から地上を見やると、インターカムを付けた長い黒髪の女性がこちらを見つめていた。

操縦者の視力を望遠鏡並みにするハイパーセンサーの補正により、黒いスーツを着こなした長身の姿が、視覚補足拡大映像（ズーム・ビュー）として真耶に映し出される。

彼女の切れ長の目に生えたまつ毛や、引き締まった体つきまでくっきりと見えていた。

濃紺色（ネイビーカラー）の機体を降下させて、同僚の元へと降り立つ。

「いえ、これ位じゃまだまだです。早く、織斑先生の様に先生らしくならないと」

そうはにかまれて苦笑を返した彼女は、名を織斑千冬という。

「”先生らしい”割には、毎年やかましい馬鹿共に手を焼かされているがな」

「そんな言い方は良くありませんよ。皆さん、元気で可愛い生徒さん達じゃないですか」

「ふん。その元気を姦しく使われても、鬱陶しいだけだ」

抗議する様な真耶に対し、そっけない対応を返す千冬。

しかし、両者の間に険悪なムードはなく、所謂飴と鞭の様な調和を感じさせる。

現に、千冬は彼女行きつけの飲み屋では真耶の事を名前で呼んでいるのだが、そうしないのはここが職場だからである。

ＩＳ学園――

アラスカ条約に基づいて設立された、世界で唯一のＩＳ操縦者育成機関。

学園副担任の真耶は、来年度から来る新入生の入試テストで行う、ＩＳによる模擬戦の教官役を務める事になっている。

その時に備えて、整備を終えたばかりで生徒がいない第３アリーナを、無理を言って訓練に使わせて貰っていたのだった。

あははと苦笑いする真耶が、ふと思いついた事を口にする。

「来年は弟さんが来ますから、もっと賑やかになりそうですね」

「賑やかで済めばいいんだがな……頼むぞ、山田先生」

「はいっ」

背が低めで童顔、大きな眼鏡を掛けている真耶の返事は、見る者によっては頼りにされようとする子供が張り切っている様にも見えた。

千冬の期待に応えようとして、彼女の弟が慣れない環境で肩身の狭い想いをしながら、ＩＳの学習に四苦八苦する所を助ける光景を夢想する。

――いきなりＩＳの勉強をするのは大変ですけど、頑張りましょう、織斑君！

――いえいえ。ここまで出来る様になったのは、織斑君が頑張ったからですよ。

――困った事があったら、これからも私に相談して下さいね。私は先生ですから。

――……い、いけませんよ織斑君。私とあなたは教師と生徒……ああでも、織斑先生が義姉(ねえ)さんになるなら魅りょ……

――――ああ、いけませんよ織斑君！　ああ、ああっ……！

両手を添えた頬を朱く染めて恍惚とする真耶の姿に、千冬は重いため息を吐いた。

「……しっかりしろ。そんな事だから、小娘共に舐められ――」

――警告！　高度八十キロメートル上空に、大質量の物体による重力変異が発生！

「――――ッッ！」

外見的・性格的に幼く見られようが、真耶は超兵器のＩＳに係わる所か、実際の運用を任せられている人材である。
ハイパーセンサーの警告と補正を差し引いても、有事の際の反応は速かった。
素早く《レッドバレット》の銃口を天に向け、ハイパーセンサーからの情報に対して即時行動出来る様、気を引き締める。
戦士としての力量は千冬の方が上なのだが、彼女は今ＩＳを装着し

ていない。
故に、即座の状況報告を求む。
「どうした！？」
「上空、高度八十キロメートルから何かが来ます！」
専門ではないから詳しくは知らないが、ＩＳが使う武装の中には空間の制御が関係しているものも存在するので、聞いた事がある。
一般相対性理論によると、何もない空間に時空の歪みが発生する場合、そこに質量のある物体が出てくると。

真耶には、一般人の目では到底届かない遥か彼方、大気圏と宇宙の境界線で起こる光景が見えていた。
突如として稲妻が中空に迸り、その中心点から発生した眩い白色光が渦を巻き、そこに穴が開くようにして漆黒の空間が除く。
そこに、それはいた。

それは白い鬼だった。

側頭部から伸びている、細長い二本の角。目元が赤く縁どられた二つの碧眼。

帽子の鍔(つば)を短くした様な、赤い菱形の額。楕円形を半分にしたビート版の様な頭頂部には、黒い三つ巴が刻印されていた。

口には牙の様なラインが浮かび、首からは二つのケーブルが覗き、胸部の中央は目玉に見える。

両肩部は中央に小さく黄色い菱形がある、上下に細長い突起が付いた怒り肩だ。

両腕には小型の盾の様なパーツがあり、その下腕部には刀を納める鞘が取り付けられていたが、そこにあるべき獲物は見当たらない。

小さいシールドがベルトの様に巻かれた腰回り。逆さまにした二等辺三角形の頂点を水平に切り取った様な、一見歩行には適していない形状をしている両脚部。

正面からしか見ていないので判別出来ないが、恐らく踵(かかと)は存在していない様に思える。

その間から覗く、長方形をした尻尾までをはっきりと認識した時、真耶は思わず呻いていた。

「お――鬼のロボット……！？」

「何……？」

千冬がそう漏らす間にも状況が変化する。

目玉の様な胸部パーツから黄金の光が膨れ上がり、流星の様に尾を引いて地上へと落下していく。

常人には捉えられない超音速で、こちらの方に――

「――――！　山間部の方へ……！」

そこまで言った直後、ラファール・リヴァイヴのハイパーセンサーが、真耶の意識に直接データを送り込んだ。

「――――！？」

――――R３３５『プロトタイプ・ラインバレル』。操縦者早瀬浩一。戦闘タイプ近接格闘型。第三世代型兵器搭載――――

全てのＩＳは、広大な宇宙空間で互いの位置を把握する為に、『コア・ネットワーク』という特殊データ通信網で繋がっている。
地上で運用されている現在は、通信の他に非限定情報共有（シェアリング）という機能が使われており、それを通して得られた情報だと理解する。

真耶が驚愕したのはその内容だ。

アラスカ条約により、ＩＳに関する情報は原則として開示しなければならない。
だが、遅れて表示されたウィンドウに記されている機体名と操縦者の名前は記憶にない。

（早瀬……浩一……？）

しかも、操縦者はこの名前からして――

「山田先生！　状況は！？」

連続して起こった呑み込めない事態に困惑していた真耶を、千冬の一喝が現実に引き戻した。
同僚に目線を向けつつ、全方位視界接続で確認するが、そこには時空の歪み――なのだろうか？――も鬼のロボットの姿もない。
「は、はい！　学園付近の山間部に落下物――――所属不明（アンノウン）の第三世代型ＩＳです！」
「何だと……！？」
第三世代型ＩＳは、各国がやっと一号機を創り出せた試作段階とはいえ、現在の最新鋭機である。
そんなものが突如現れる事態など、非常時以外の何物でもない。
「先行して偵察を！　すぐに教師部隊を送る！」
「はいっ！」
全うに運用されているＩＳではない以上、放置しておく事は出来ない。
しかも、操縦者及び機体をあそこまで輸送した者の目的が不明なのだ。
最悪の場合、付近の住民から死傷者が出かねない。
尋常ではない被害が及ぶ可能性がある。

ＩＳを倒せるのはＩＳだけ。
軽く肩慣らしをしただけの今は、エネルギーの余裕も十分にある。
真耶は突如として現れた謎の機体の元に、愛機を駆って飛び出した。

第０２話　サイアクな始まり

――Ｄソイル展開（オープン）、配列を開始。集積回路の形成完了。エネルギー循環開始（スタート）。

――Ｓシステム起動。各部エネルギー・バイパス、スラスター及びハイパーセンサー、正常作動を確認。

――Ｒ３３５『プロトタイプ・ラインバレル』のフィッティングとパーソナライズは、既に終了しています。

――最新の身体情報（フィジカル・データ）に合わせた、システムの微調整を開始して下さい。

地表へと一直線に降下していく黄金の流星が、山間へと突入すると同時に急停止、その場で滞空して球形を成して着陸する。

やがて光度が弱まっていき、それまで輪郭しか判別出来なかった黒いシルエットが、その姿を現していく。

そうして現れたのは、この世界では広く知れ渡っている機械――Ｉ

Ｓだった。

殆ど黒一色と言っていいカラーリング。

頂点を水平に切り取った、逆三角形の両脚部。付け根に排気口が見える両腕部。腰部には小型の盾が横一列で並び、胸部装甲の中央は白い目玉に見える。

特徴的なのは、戦国時代の侍が身に付けていた甲冑の様なデザインをしている、肩のアーマーと兜。

両下腕に取り付けられた、刀が収められた鞘。

そして、それを装着しているのは――黒いスーツを着込んだ、少年だった。

「……う……」

ゆっくりと瞼を開けると、燦然と輝く太陽の姿が映る。
思わず目を細めた時、それを奇妙に感じた。

――眩しく……無い……？

三半規管と土の感触で、自分が地面の上に寝そべっている事を知覚する。
青空に向かって伸びていく木々と、真後ろの土の粒、それに混入している石ころが見える。

まるで、両目に横や真上、後ろの景色が送られているのを見ている様な、そんな感覚……

「――――っ！？」

次いで、情報が意識に直接送られてくる。

――マキナのものが用いられている操縦方法と、それによる基本動作。

――機体の特性と性能値（スペック）。

――装備と装甲（アーマー）残量の状態。

――ハイパーセンサーの精度とレーダーの探知範囲。

――エネルギーの保有量と出力限界、それによる活動時間と行動可能範囲。

他にも膨大かつ多種多様な情報が流れてくるに至って、浩一の意識は完全に覚醒した。

上半身をむくりと起こす。

だが、それは重力に逆らっての勢いではなく、中空に浮いている状態で身体を傾けての動作だった。

まるで、宇宙にいた時の様な……

……分かっている。

何故浮遊しているのか。どうやればどこまで飛べるのか……

「何だよ……これ……？」

目の前に掲げた両腕は、刃物の様に鋭利なデザインのマニピュレーターが五本の指に装着され、ラインバレルの様に、刀が収まった鞘と放熱システムが取り付けられている。

……知っている。

この機体がオーバーライドを使えるという事。
それがコンセプトの一つである機体という事。今は未完成であるという事。

これがマキナではなく、ＩＳという機械である事。

名前が、『プロトタイプ・ラインバレル』という事も。

白い鬼ではなく、黒い侍みたいな姿をしているが――

「これ――ラインバレル、なのか……？」

眼を向けずとも見える、オーロラで赤く不気味に彩られていた頭上の空は、元の青さを取り戻していた。
太陽を覆い隠していた、ついさっき中心をぶった斬ったばかりの時空のゲートも見当たらない。

俺……この世界を護れたのか……？

ここ、御崎町の山なのか……？

――何となく、違う気がする。

「ここ……どこだよ……！？」

首を左右に巡らして辺りを見回す。

声が上ずる。

気が付いたら知らない山の中にいて、ラインバレルに酷似しているとは言え、知らないロボットの様な装甲をいきなり身に纏(まと)っている。

浩一の心に、知らない間に身体を勝手に改造された様な不安感が募っていった。

何で、山の中にいるんだよ。

俺、ラインバレルのコックピットにいたのに……

「――――！！　城崎……！」

浩一の思考回路に火花が散った。思わずがばりと立ち上がる。
彼女の――考えたくはないが、死んだ彼女の身体は何処へ？
マキナのラインバレルのコックピットの中に、置き去りになっているのだろうか？

だったら早く呼んで――！
そこまで考えて、今度は仲間達――特にファクター達の安否が浮かぶ。

『ラインバレルに全エネルギーを送った』という森次の言が思い出されたからだ。

それでヴァーダントらが停止したら――ファクターは、生きていられない。
マキナのシステムに詳しい訳ではないが、一度、エグゼキューターにラインバレルのエネルギーを使い過ぎて死にかけた事があるから分かる。
道明寺と、加藤機関の沢渡とユリアンヌは無事だろう。
ハブ・ダイナモをぶった斬る直前まで通信が届いていたし、乗っているのはアルマだ。

けど……ＪＵＤＡに避難してる理沙子達は？
それに、森次さん達は――――！！
早くラインバレルを呼んで、通信で、緒川さん達に連絡を……！

「――っ！」

浩一はいつもの様に、声を上げてラインバレルを呼ぶ事を決断した。
ＩＳにも通信機能があるが、これで脱出艇に繋がるかは分からない。
城崎を見つけたい。

「来い！　ラインバレ――」

――ジジジ、と空間にスパークが散った。

「な……何だ！？」

左方でそれを目撃した浩一が、突然の放電現象に向き直る。

その時には、うっすらと輪郭が見える三つの人型が現れていた。

「これは……！」

――電磁迷彩！

向こう側が透けて見える立体が、徐々に彩度を強めていく。

そうして現れたのは――

「迅……雷……？」

浩一の言葉に、そうして疑問符が付くのも仕方のない事であった。
彼が知る迅雷は、二十メートルの巨大ロボット『アルマ』であり、曲線的でスリムなデザインをしていた。
だが、目の前にいる三機の形状は、それとは異なっているのだ。

それ所か――プロトタイプ・ラインバレルの様に、人が身に着けているのである。

顔面全体がシャッターの様な格子状だった頭部が、両目だけを出す様に黒いラインが目元に浮かんでいた。
額には陰陽師が使いそうな、黒と白の人魂が入り混じった様なマーク（陰陽勾玉巴という言葉を浩一は知らない）が刻印されている。
中心が虫眼鏡のレンズの様だが、胸部装甲のデザインはマキナの物に酷似していて、アパレシオンの様に板状のパーツが取り付けられている。
両肩の辺りには四角いスラスターが浮遊し、正面から見ている為に形状が分からないが、後背にも背負う様にアーマーが存在していた。

ダイバーが着る様な肌にぴっちりと張り付く黒いスーツを身に着けた人間が、そうした装甲を装着している様に見えるのである。
両腕部と両脚部もそうで、腰部にも幾つか金属板（プレート）が取り付けられており、全体的に直線的な外形（フォルム）をしていた。

何よりも違うのがカラーリングで、プロトタイプ・ラインバレルの様に殆ど黒一色だった塗装が、二機は白、一機は緑に塗られている。
他にも、胸部の先端等所々が彩られていて、緑色は赤、白色は薄紫と水色のラインが引かれていた。

人が身に着ける装甲。スラスターだと理解出来る、浮遊している一部のパーツ。
これは――

「IS、なのか……？」

浩一がそう漏らした直後、三機の迅雷が行動（アクション）を起こした。

手元から光の粒子を放出し、収束させたそれから武器を形成したのである。

細身の長刀が、薄紫機の右手に。
ペインキラーが使っていた逆手持ちのレールガンが、水色機の左手と緑機の両腕に握られている。

「これは……！」

『展開（オープン）』――！

それを認識した直後、水色機が発砲してきた。

咄嗟に上空に逃れた浩一の身体が、両足から勢いよく縦回転する。

「く、ッ――！？」

余計な勢いが止められない。

その場に踏ん張る様にして、ようやく静止する。

「何だよお前ら！！　いきなり攻撃して……」

浩一が困惑の怒声を上げる間にも追撃が迫った。

水色ラインの迅雷が両肩の浮遊スラスターを吹かし、その底部にマウントされた鞘に納められたブレードの柄に手を掛けて接近してくる。

「くそっ……！」

浩一も咄嗟に左下腕の柄を握り、両機が抜刀と同時に斬撃の軌道に入る。

マキナは、ファクターの電気信号を読み取る事で操縦出来る。

その際は、マキナの目から見える映像がファクターの視界に映し出される――つまり、実戦では刃物や銃弾が迫る恐怖がモニターを通してではなく、実際にやられた様にリアルに襲い掛かって来るのだ。どちらかと言えば、”ファクター自身がマキナに変身する”という感覚が近い。

故に、生身での戦闘経験が皆無であった浩一でも、実戦経験がある以上全く対処出来ない訳ではなかった。

甲高い金属音の後、お互いが肩手持ちにした刀を互いに力で押し合う格好になり、パワーはこちらが上回っている事を実感する。

このままブレードを弾き飛ばして――！

そう実行しようとした刹那、左腕のレールガンで至近距離から銃口を向けられた。

連射される頃には力比べを断念して身を引いたが、やはりブレーキが利かず、体制が崩れた所を緑機に狙われる。

思わず両腕を交差させて身を庇う浩一が目を閉じる間も無く、二発の砲弾が直撃して爆炎の華が開く。

「ぐあああッ……！」

四散するかと思われたその身は、六角形(ヘックス)の集合体で構築された光の壁によって護られ、原型を留めていた。

勢いよく吹っ飛ぶ身体を、浩一はその場でたたらを踏む様にして制動する。

「ッ……！　な――――」

何とか姿勢制御をした所で、浩一は眼を瞠(みは)った。

見た事が無い物が、その眼に映ったのだ。

自然と、ハイパーセンサーによる資格補正の倍率が上がる。

円形のグラウンド。幾つかある野球のスタジアムの様な建物。奇妙に曲がりくねった塔。

その他幾つかの建物等が、ここから離れた島に存在している。

あんな物――御崎町所か、自分の世界には無い。

「ここって……まさか……」

確信を得る間は与えられそうに無かった。
三機の迅雷が浩一を取り囲む様に浮遊し、それぞれ手にした刀を構え、レールガンの銃口をこちらに向けてくる。

「くっ……！　そうかよ……だったらッ！！」

浩一は、手にする近接ブレードを両手で正眼に構え、目の前の危機と相対した。

第０２話　サイアクな始まり（後書き）

今回は、一部の展開が釋廉慎さんから頂けたアイディアが元になっています。釋廉慎さん、またまたありがとうございます。

――台詞少ないなオイ（汗）。まあ、次の次は会話パートなんですが。

第０３話　正義の味方、再起動

『うおおおおおッッ！！』

スラスターを吹かし、その勢いのままに繰り出した突きは、ひらりと左に体を捻りながら躱された。
そのまま上下反転しつつ、右足で放った緑機のオーバーヘッドキックが、左側頭部に直撃する。

「あああああっ！！」

まるで、荒れ狂う海に呑まれて、映像のノイズの様に自分という存在そのものが乱れる様な感覚。
肉体的苦痛こそ感じないが、身体がバラバラになっていくのではないかという精神的疲労が蓄積していくのを感じていた。

「――ッ！」

素早く持ち直し、眼前のモニターに映るデータ類に調整と修正を加えていく。

彼女は理解していた。

自分がなぜここにいるのか。自分が今やるべき事を。

真耶は木陰に身を潜め、四機の所属不明（アンノウン）ＩＳにコア・ネットワークで感知されない様、潜伏（ステルス）モードという機能を使い、視覚補足拡大映（ズーム・ビュー）像で戦況を監視していた。
その表情は、困惑によって微妙に曇っている。

（あの機体……）

プロトタイプ・ラインバレル――非限定情報共有（シェアリング）で情報が送られてきた、あの白い鬼の様な巨大ロボットと対を成して黒い、侍を連想する近接格闘型らしきＩＳ。
飛行速度と斬撃の鋭さ、敵機とのブレード同士の拮抗具合から判別出来る出力。
三機の連携攻撃に対応する際の反応速度。

現行機の第三世代型ＩＳにも引けを取らない――いや、その中でも最高位（ハイエンド）と言っていい程のスペックだと確信する。

だが、明らかにそのバランスが取れていない。
取ろうとする行動に対してスラスターの出力が合わな過ぎているせいで、攻撃にしろ飛行にしろ回避にしろ、移動する度に勢いよく流されている。

現にその操縦者――『早瀬浩一』は防戦一方だった。

水色機へ刀を横薙ぎに振るうが、ブリッジする様に上半身を仰向きにして回避され、その体勢で繰り出されたハイキックで反撃された。

続いて、薄紫機がバレエでも踊るかの様に身体を横回転させつつ、右手に握った長刀を振り下ろしてくる。
ブレードを頭上に掲げて受け止めた時には、緑機が充分に電磁力を溜めた二丁のレールガンを撃ってきた。

慌てて距離を取れば、水色機の連弾を喰らう羽目になっている。

彼の攻撃が力任せだという面もあるが、量産型と思われる新たな所属不明（ア ンノウン）ＩＳの性能も高い。
早瀬浩一は、何故プロトタイプ・ラインバレルの第三世代型兵器を使わないのか。
機体共々未完成だった時を、あの三機に襲撃されたのだろうか……？

では、あの鬼の様な巨大ロボットは何なのだろう？　そもそも、何故ここへ墜落した途端に襲われている？

（それに、あの三機……）

それぞれ白と緑を基調としてカラーリングされた、直線的な外見（フォルム）の機体――恐らくは、リヴァイヴと同じ機動性重視のＩＳだろう。だが、それを考慮しても運動能力が尋常ではない。

加えて、ハイパーセンサーの補正下にある今ですら、動きのリズムや乱れが全く感じ取れない。あまりに機械的過ぎる。

「……」

まさかという過（よぎ）った想いは、早瀬浩一の危機によって中断された。

水色機のレールガンを喰らってプロトタイプ・ラインバレルの力が緩んだ瞬間を見計らい、鍔迫り合いをしていた薄紫機が長刀を押して突き飛ばし、腹部を強かに蹴りつけたのだ。

体勢を崩して流されていく彼を狙って、緑機が二丁の銃器を構えた。無論フルチャージ済みで、銃口からバチバチと放電が漏れている。

（いけない！）

ＩＳの防御機能は、肉体を外傷から護ってはくれるが、相殺しきれない分の痛みは消してくれない。
あのまま砲撃を喰らって気絶したら、良い的になってしまう――！

戦闘エリアに接近した時から、指揮権を持つ千冬との通信が出来なくなっていた。
原因は不明だが、何らかの形でジャミングが働いているらしい。

眼前で行われている戦闘は学園側も気づいているだろうが、増援は状況が分からない為下手な手出しはせず、付近の住民に被害が及ばない様警戒しながら、両機に気づかれない様気を配る必要がある為に、こちらに来るまでもう少し時間がかかると真耶は見ていた。

そうなると自身の判断による単独行動しか選択肢が無くなるのだが、一連の戦闘を見る限り、調整が成っていないプロトタイプ・ラインバレルは脅威ではなく、自分一人でも充分取り押さえられると判断出来る。

所属不明（アンノウン）三機の手で早瀬浩一が死亡してしまったら、あの機体を何の目的で開発したのかとその経緯が聞き出せなくなる。
それは彼女の立場としても、山田真耶個人としても看過出来なかった。

故に、子供の危機に駆け付けたい心情を堪えていた真耶はすぐに飛び出して、手にした《レッドバレット》で緑機を銃撃しようとした。

だが、またしても予想外の出来事が起きた。
プロトタイプ・ラインバレルが、それまでとは違う機敏な動作で砲撃を回避し、自力で窮地を脱したのである。

浩一は、緑機の全力砲撃をそのまま喰らうつもりは無かった。
ラインバレルなら何で思い通り動いてくれないんだよ、と何度も苦虫を噛み潰した、水流に流される様に思い通りに動かない身体でも、何とか避けなければマズいと思った。

マキナの操縦とは違う、自分そのものが空を飛べる超人になった様な全能感を感じたのはその時だ。
思い通りに動く様になった機体を操縦し、レールガンを避けた瞬間

――意識に直接情報が送られてくる。

システムの微調整が、自分の最新身体情報（フィジカル・データ）に合わせて終了した事。

それをやってくれたのは。

遅れて表示されたウィンドウに映し出されたのは――

（き――城崎……！！）

長い黒髪。意思の強い瞳。胸に血の染みがある、見慣れたＪＵＤＡの黒い制服。

ラインバレルのコックピットで、自分を真っ直ぐに見つめてくるのは――紛れもなく、城崎絵美だった。

…分かる。

何故城崎が生きているのか。彼女がいるコックピットが、このＩＳのどこにあって、何なのか。

『来ます！』

「――ッ！」

棒立ちになっていた自身に目掛けて迫り来る水色機の連弾を、浩一は上空へ飛んで回避しつつ、距離を取る。

「この……ッ！　空気読めよ、お前ら！！」

急に動きが良くなったプロトタイプ・ラインバレルを警戒してか、横一列に集結した三機の迅雷へ向けて、浩一は怒声を叩きつける。しかし、それに帰ってきたのはいつものキツい台詞だった。

『今は戦闘に集中して下さい！　私の事なんて、気にしている場合ではありません！』

「わ、分かってるよ！！」

言葉だけが意識に直接届き、眼前のウィンドウはもう消えていたが、城崎が笑っているのを感じた。

もう、二度と見る事が出来ないと思っていた笑顔だった。

「……」

本当……厳しいな、城崎は……

大事な人が生きてたってのに……それを喜ばせる前に、状況を分からせようとするか、普通？

けど――ナイスな展開だよ！

俯いた顔を上げた浩一には、既に闘志が満ち溢れていた。

『今から、無人機の行動パターンを送ります』

「――！　こいつら、やっぱり……！」

城崎と再会する前から、浩一は眼前の迅雷三機は無人機なのではないかと思っていた。

実際に戦った訳ではないが、プリテンダーと一緒にフラッグを襲撃したアルマの迅雷がそうだったし、さっきまで見せつけられていたアクロバティックさの切れが、人間の動きとは思えなかったからだ。

ラインバレルを手に入れて思い上がっていた時から、コックピットの操縦者諸共有人機を斬って来た。
それでも、進んでそれをやりたいかと言われれば、答えは否である。
無人機相手なら、何の遠慮もいらない。

『分かりますか？』

「ああ……！」

城崎は衛生兵器破壊作戦で、ヘリオスの制御にシステムの大半を割き、操縦が半自動化（セミオート）したヤオヨロズの行動パターンを分析した事がある。

――戦闘開始時から蓄積していたデータを元にした、敵機の行動パターン。

プロトタイプ・ラインバレルを通して、城崎が教えてくれているのが分かる。
迅雷三機の動きが、簡単に予想できる。

「よぉし……行っくぞォッ！！」

二度の宇宙戦と、プリテンダーとの空中戦。グラン・ネイドルの砲火回避。
それら三次元戦闘の経験を武器にして、プロトタイプ・ラインバレルが飛翔する。

無論敵側もただ黙って見ている訳ではなく、即座に散開した三機の内、水色機と緑機が迎撃の弾雨を放つ。
だが――

ハイパーセンサーによる全方位視界接続と高速思考。Ｓシステムの高出力と反応速度。
それらが見事に融合し、無人機の連弾は黒い機体を追い切れていない。

浩一の全身には、得も言われぬ高揚感が満ち満ちていた。

「俺は――」

右手の銃器を撃たれる前に、左手で緑機の手首を掴んで銃口を逸らす。
敵機は零距離射撃が間に合わないと判断したのか、もう一丁のレールガンを投げ捨て、脚部装甲から飛び出してきたナイフを開いた左手に握る。

「この(コイツ)機体を――」

その小刀が突き出される前に、胸部を袈裟懸けに斬り裂いた。確かな手応えを感じる。
バチバチと青白い放電を始めた緑機の頭部を鷲掴みにして、後方から水色機が放ってくるレールガンの連弾から逃れる。
尚も手にした銃器を乱射してくる迅雷へ、大きく迂回する様に弧を描いて近づいていく。

「動かせるッッ！！」

今までの戦闘経験を元にして頃合いを見計い、ブン投げた。
緑機が激突した瞬間に爆発し、吹っ飛んだ水色機が大勢を崩す。

「おおりゃあああッッッ！！」

今度は浩一が追撃を掛ける番であった。
緑機の爆発によって生じた煙を突っ切って接近し、大きく振りかぶった両手持ちの唐竹割りで、水色機の頭頂部から股間までを一刀の元に両断する。

そのまますれ違う様に離脱する頃には、迅雷は残り一機となっていた。

「さあ、次は――！」

お前だ、と言いかけた浩一の口が止まった。

見失った――？　どこだ！

『上ッ！』

城崎の声と共に、ハイパーセンサーが位置情報補足を送ってきた。
最後の一機となった、薄紫ラインの白い迅雷――それが太陽を背にして、急降下しつつ長刀を突き出してくる。

「――ッ！」

浩一は、回避よりも迎え撃つ方を選んだ。
激突しようとするかの様に真上へと飛び、迫ってくるブレードに向けて、手にした武装で突きを放つ。
正面同士からぶつかり合った近接武器は、片方が切っ先から粉々に削られていった。

お互いにすれ違った瞬間、使い物にならなくなった長刀の柄を放り出した迅雷が、粒子からレールガンを構成する。
それは、全方位視界接続によって浩一に見えていた。

「うらぁっ！」

身体を反転させて投げた近接ブレードが、プロトタイプ・ラインバレルへと銃口を向けたレールガンを握る左腕へと、引鉄（トリガー）が引かれる前に吸い込まれる。

敵機はスパークを散らし始めた左腕を、脚部から射出したナイフで肩口から斬り落とした。
一拍遅れて、刀に貫かれた部位が手にした銃器ごと爆発四散する。

「まだやろうってのかよ？」

右手に残ったナイフで構える迅雷に対し、二機を続けざまに倒して勢いづいた浩一が、不敵な笑みを漏らす。
右下腕部に残ったもう一振りの近接ブレードを、左手でゆっくりと

抜刀し、利き手の右手に持ち替える。

「けど――これで終わりだっ！」

「そこまでです！」

「――っ！？」

紫機へ突進しようとした時、不意に横合いから掛けられた声に、浩一は一瞬身を竦ませた。

水着の様なスーツを着た、大きな眼鏡を掛けている女が、銃器を構えてこちらへと接近してくる。

その身体には、濃紺色に染め上がった、四つの翼とシールドを持つ

機体。

――ＲＲ－０８『ラファール・リヴァイヴ』

――五十一口径アサルトライフル《レッドバレット》

機体と武装の照合データが送られて来た時には、同型機を身に着けた女性達が地上の木陰から次々と飛び出してきた。
最初に接触した眼鏡の女が、外見に似合わぬ威厳を込めて勧告する。

「国家認証無しでのＩＳ運用は、刑法違反です。両者の身柄を拘束します！」

拘束――！？

「な……いきなり何言ってるんですか！」

ついさっきまで人類の命運をかけた戦いをしていたら、気が付いた時には知らない機械を装着していて、アルマの様な無人機にいきなり襲撃され、死んだと思っていた少女が生きていて、その上犯罪者扱い。
浩一が目紛るしく展開された事態についていけずに混乱してしまうのも、致し方ない事だった。

仕掛けたのはそっちだ、という反論は、顔のすぐ傍を通り過ぎて行った銃弾によって黙らせられる。

「……二度目はありません」

『……早瀬君。ここは、そちらに従って――』

――眼鏡の女に威嚇射撃された直後、迅雷の身体が痙攣する様にガクガクと震えだした。

『――――ッ！』

青白いスパークを散らし始めた機体の姿に、その場にいた誰もが息を呑む。

一拍遅れて球形の光を放ち始めるにいたって、真耶はその現象が何なのか看破した。

（まさか――自爆！？）

所属不明（アンノウン）が無人機だと疑いを持った時点で、想定する事は可能だった。

だが、無人機ＩＳと実際に相対した経験が無い教師部隊は、この瞬間までその可能性を考慮出来ずにいたのである。

彼女らが己の迂闊さを悟る間も無く、所属不明（アンノウン）の薄紫機がスラスターをフルスロットルにして、真耶の元へと向かう。

戦闘に関して、真耶の予想外の事態への対応力は決して低くなかったが、状況が悪かった。

自分を含めた教師部隊は、プロトタイプ・ラインバレルを取り囲む為に密集している。

加えて、自爆によるエネルギーの威力と規模が、どれ程のものなのかが分からない。

距離を取って逃げても、仲間諸共巻き込まれる可能性があった。

かといって、下手に攻撃を加えて暴発させる訳にもいかない。

一体、どうす――

「止めろオオオオォォォォォッッッ！！」

真耶は手を出しあぐねていたが、プロトタイプ・ラインバレルは迷う事無く突進し、爆弾の胸部へと刃を突き立てた。

直後、所属不明（アンノウン）の機体が盛大な爆炎を噴き上げる。

とっさにシールドを前面に出して耐えた真耶の眼には、落下していく確保対象の姿が映っていた。

第０４話　正義への道標　前編（前書き）

本当はもう一段階くらい進ませるつもりだったのですが、中途で詰まってしまったので前半・後半に分けて書きました。
モチベが落ちたら困るし……

第０４話　正義への道標　前編

「『迅雷』の戦闘に関してですが、通常のシールドバリアーは確認されましたが、絶対防御が発動していません」

ＩＳが超兵器たる所以（ゆえん）の一つである自動防御（オートガード）機能には、『シールドバリアー』と『絶対防御』の二種類がある。

一つ目は、操縦者を覆う特殊なエネルギーバリアであり、攻撃を受けた際は瞬時にハニカム構造の盾を形成して防ぐ。
その出力で相殺しきれなかった分の衝撃はそのまま操縦者に通り、受ける度に消耗するバリアー残量が無くなれば破れる。

二つ目は、シールドバリアーで防ぎきれない威力の攻撃を受けた際、操縦者を死なない様に護る為の能力である。
だが、名前に反して絶対無敵ではなく、これをも突破する程のパワーには無論効果が無い。
加えてシールドに使うエネルギーを極端に消耗する為に、装甲の破損やシールドの減少で事が済む場合は発動しない。

報告をしているのは、水色の短髪をウルフカットにした、野性的というよりは知性的なイメージを醸し出している十代女子。
白いＩＳ学園の制服に身を包んだ彼女は、名を更識楯無という。

立派な机の上で両手を組んで話を聴いている人物は、総白髪で顔に年相応の皺(しわ)が刻まれている。
ＩＳ学園の運営を取り仕切っている初老の男、轡木十蔵である。

リヴァイヴ真耶機とプロトタイプ・ラインバレルのＩＳ活動記録(アウト・ログ)から引っ張り出して来た戦闘映像が、十蔵の眼前に浮かぶディスプレイに表示されていた。
プロトタイプ・ラインバレルの近接ブレードによる斬撃を受けた際、六角形(ヘックス)の集合体による防御壁は破壊されているが、そのまま無抵抗に迅雷のボディが斬り裂かれている。

ＩＳなら必ず備わっている上に、システム設計上カット出来ない絶対防御の未作動。
人が動かす以上、存在しえない筈の無人機ＩＳ。
三機の迅雷が絶対防御非搭載型だったのは、機体が無人機の試作型(プロトタイプ)として創られたが故の弊害、または改良点なのか。

あるいは、量産型故の簡易性によるものなのか――

どちらかは不明だが、使用されているコアがこちらが知っている物と同一であるという保証が無い以上、後者を想定しておくべきだろう。
少なくとも、迅雷を差し向けた勢力はＩＳシステムの根茎に手を出

せる程の技術力を有し、機能中枢であるコアを複数保持し、それを搭載する同型機をも開発していた。

あの三機大破で所持分を全て損失してくれればいいがとは思うが、解明した技術を元に新たなコアを創り出し、それが悪用される可能性が０では無い以上、決して楽観は出来ない。

ＩＳに対抗出来る力は現段階ではＩＳ以外存在せず、国防関係の配備数は決して十分とは言えない。

有り体に言えば――世界の危機だ。

放棄された緑機のハンドレールガンや、プロトタイプ・ラインバレルのマニピュレーターに付着した塗料等の資材からルートを割り出し、敵勢力の拠点を急襲、その技術を根こそぎ――という手もある。

この世界で創られているならば、の話だが。

「早瀬君が、何故ラインバレルを動かせるのか――それに関しては？」

「両名にコンタクトを取らせましたが、”ラインバレル自身も理解していない”という事です。彼らを学園に入学させ、プロトタイプ・ラインバレルの稼働データを取るべきではないかと」

「――そうですね。それに……」

半ば面白がる様な口調で、子供の様に十蔵は言った。

「君自身――彼がデータ通りの男の子である事を、期待しているのではないですか？」

――お前には……分からないだろうな。抵抗したくても出来ない人の……馬鹿（バカ）みたいな夢に縋（すが）るしかない人の気持ちは……

――でも、俺には分かる！　そういう人達の気持ちがな！

――今の俺には、戦う力がある……！　確かに、それは城崎から貰ったもので……俺の力じゃない。俺の正義なんて、何の役にも立たないちっぽけなものかもしれない……！

――だけど、なりたいんだ！　本当の正義の味方に！

「……やっぱり、分かります？」

楯無が苦笑を返す。

そうして覗かせているのは、先程までの真剣な仕事人とは違う、私人としての顔だった。

分からいでか、とでも言う様に十蔵は穏やかに笑いかけた。

「学園、及びその近辺に於ての監視。プロトタイプ・ラインバレルの整備の手配――宜しくお願いしますよ」

更識家は、裏の実行部隊に対する家系――所謂対暗部用暗部の名家である。

昔から裏工作に強い家柄にとって、気づかれない様に監視するなどは造作も無い。

「ええ。これでもかって位、発信機を向こうから付けてましたし」

無論、それを彼に教える様な真似はしない。

――その方が、面白そうである事だし。

悪戯(イタズラ)っぽく笑った楯無が一礼してその場を去ろうとすると、重厚な作りのドアを開いて、二人の女性が入れ違いで入ってくる。

織斑千冬と、山田真耶であった。

二人には悪い事をしている、と真耶は思う。

先程まで繰り広げていた戦いで絵美を”喪い”、それでも彼女の”正義の味方であれ”という想いに応え、己が身を顧みず、仲間達の命の力で人類を護った早瀬浩一。

父親が死んだ時の記憶を思い出したばかりなのに、その後にちゃんと和解出来ないまま、実の兄を亡くしている城崎絵美。

その上、目が覚めてみれば味方がいない異世界で、いきなり謎の機体に襲撃され、後に受けたのは労いではなく厳しい詰問。

正直、心が痛む。

あくまで、あのデータが事実であればの話だが……

「出ろ」

鵜呑みにするべきでは無いと分かっていても、胸中が穏やかではない真耶の隣にいる千冬の手が開かれ、握っていた一つのアクセサリーが露（あらわ）になる。

それは後ろに発条（バネ）が付いた、左三つ巴と一本の線（ライン）が黒く印されている、鉄色をした板状の物体。

浩一が遠藤シズナに渡したものと同形の、ネクタイピンだった。

それから溢れる様に放出された光の粒子が、一瞬にして集結し――

早瀬浩一と、城崎絵美を成した。

「おお……！」

年甲斐も無くはしゃぐかの様に、十蔵が感嘆の声を漏らす。

ＩＳには、拡張領域（パススロット）という使う武器を量子に変換して収納する為のシステムがある。

自己修復・増殖機能を持つ、マキナという機械が持つ固有ナノマシン”ドレクスラーソイル”――略称Dソイルを移植された人間”ファクター”である二人は、厳密に言ってしまえば『マキナを動かす為のモノ』。
人間性を持ちながら、人間ではない存在――

プロトタイプ・ラインバレルを分析した結果、Dソイルによってマキナの修復・エネルギー循環を行い、基本構造を司りサポートする”Sシステム”が使用され、コアとリンクしている事が分かった。
故に、同型のナノマシンを体内に持つ浩一と絵美はあの機体の一部としても扱われ、システムの微調整等の為の武装として拡張領域（パススロット）に収納する事が出来る。

ISの操縦は初めてであるという浩一が、いきなりそのスペックや操縦方法、絵美が何故”生きて”いるのかを知っていたのもそこに起因していた。
迅雷との戦闘の際、浩一がウィンドウで目にしたマキナ版ラインバレルのコックピットは、それを元にした、絵美が拡張領域（パススロット）に入っている姿のイメージ映像だ。

二人が黒いIS共々この世界に来た際、絵美がその中に収納されていたのは、ネイキッドとの戦闘で大剣によって胸部を貫かれ”破損”していたからだった。
拡張領域（パススロット）では、意識があれば肉体の損傷は関係ない。
マキナのラインバレルが蓄積した戦闘データを学習していたプロトタイプ・ラインバレルのコアは、主に戦っていた浩一を操縦者とし、絵美を武装として拡張領域（パススロット）に量子変換（インストール）、Dソイルで彼女の肉体を修復させるのが最も効率的だと判断したのだ。

そうして、ＩＳの自動調整機能では対応しきれないシステムの微調整を、絵美がプロトタイプ・ラインバレルに教えて貰いながら、浩一の最新身体情報（フィジカル・データ）を元にして完了させ、反撃を開始。
最終的に残り一機の自爆から自分を庇った事で、プロトタイプ・ラインバレルが操縦者共々ダメージを受けた。

その後黒いＩＳを学園まで運び、昏睡状態になった浩一を拡張領域（パススロット）に収納、その中にいる二人のデータ化された記憶を大体見せて貰った。
絵美からの証言と合わせての事情聴取もあったが、この世界ではＤソイルの活性剤など開発されていない。
浩一の負傷を直すには、拡張領域（パススロット）に入った絵美が活性剤の代用をするのが最適だったのだ。

ＩＳにも操縦者保護機能があるが、あれは出血などの悪化を食い止めるだけで、怪我を直すには病院等で治療が必要になる。
絵美から聞かされてはいたが、活性化再生治療も受けずにこの回復力……ファクターが人間離れしている存在だという事を、改めて思い知らされる。

「山田先生。この二人は人間ではない。モノだ」

「――！」

まじまじと見ている姿から心中を察した千冬の言に、真耶は思わず反発した。

「織斑先生！！　そんな言い方……！」

「モノならば、生きていてはいけないのか？」

――その事実を、客観的に受け止めろ。

言いたい事はそれで、彼らの人間性を否定してはいない。真耶は矛を収める。

――この話し合いが、上手く行ってくれればいいんですけど……

そう願わずにはいられない真耶の眼前で、十蔵が話を切り出し始めた。

第０４話　正義への道標　前編（後書き）

台詞が少ないのは、私の技量の問題なのか、それとも書き方の特徴なのか……？

いやぁ、書いて分かったんですが、シリアスばっかり書いていると息が詰まりますな……

各キャラらしさが――出てるかなぁ、今（汗）。日常会話シーン書きてぇ……

０～４話＋設定まで書きましたが、１巻序盤の学園編入編は７、８話位かな。

第０５話　正義への道標　後編（前書き）

今回は、女尊男卑社会に関して独自解釈が入っております。
ツッコミ所があるかもしれません……（汗）

第０５話　正義への道標　後編

貶めから寛大さへと急変した一連の会話に、二人がどうしたものかと戸惑っていると、目の前にいた初老の男が、柔和に言葉を紡ぎ始めた。

「初めましてですね、お二方。私はこのＩＳ学園の用務員、轡木十蔵と申します」

「用務員、さん……？」

浩一にはそれが以外だった。
こんな場所で机の前に座っているから、てっきり一番偉い人だと思っていたのに。

「表向きは、妻が学園長を務めております。今の社会は、その方が色々と融通が利きますので」

「……」

思っていた事に返答された少年の顔が強張る。
目覚めた時には既に身柄を拘束されて、自分が知るべき事については、城崎共々真耶から教えられた。

「この世界と、プロトタイプ・ラインバレルに関する話は、山田先生から聞きました」

十蔵が眼を向けると、城崎は真摯な態度で語り出す。

「今の社会が、どうして女尊男卑になってしまったのか――」

開発は普及していったが――宇宙進出は一向に進まず、ＩＳはスペックを持て余していた。

アラスカ条約によって戦争には使えないとはいえ、ＩＳは世界各国が有事の際に備え、同盟や軍事協力を結んでまでも、互いのＩＳによる侵略行為に対する抑止力として、いざという時の防衛力として、競って開発を行う国防の要である事に変わりはない。

加えて、篠ノ之博士がコアを四六七個以上作成する事を拒み、その製造方法が今だ分かっていない為、各国に割り振られた数少ない貴重品によって動くＩＳに携わる者――特に操縦者は、選りすぐりが求められた。

これまでの兵器の例に漏れず、開発に多額の費用がかかるとなれば、それは尚の事である。

かといって、優秀な人材を確保する為に特権階級染みた好待遇を用意し、ＩＳを専守防衛のみに使えば、”普段戦う相手がいないのに、殆ど何もしていないのに英雄扱いか”と世論の反発を受けるのは必至だった。

そうして、ＩＳは人材の確保が急務である事を理解して欲しいという各国の思惑から、その力をより一層世界に知らしめる宣伝戦（プロパガンダ）として、競技用の飛行パワードスーツとして扱われ始めた。

それだけならまだ良かったのだが――ＩＳには、致命的な欠陥があった。

何故か、女性にしか使えないのである。

結果として、更なる性能アピールの為に女性優遇の制度が次々と施行され、”ＩＳを動かす能力を潜在的に持つ女性は、男性より優れた存在である”という選民思想染みた考え方が、十年間で広まっていったのである。

そうした横柄な態度を取る者はごく一部で、大多数の女性はある程度男性の立場を尊重して”女の為に男が”云々というレベルに留まっており、昔あった男尊女卑の価値観が逆転した程度だという。

だからと言って、一方的な態度や納得出来ない理由で下に見られるなど、自尊心（プライド）が高い浩一は”はいそうですか”と受け入れられはしない。

何より――

「ISが凄いってのは――動かしたから分かる！」

俯き、忌々しく顔を歪めて吐き捨てた浩一の拳が、改めて強く握りしめられる。

「けど、だからって……この世界は、そんなのが当たり前になってるって言うのか……！！」

半年前まで無力感で何もせずに生き、望んでいた力（ラインバレル）を手にして、”特別な存在になったのだ”と一度増長してしまった――

そんな経歴を持つ彼にとって、これは決して許容出来る事ではなかった。

「早瀬君……」

「それで――俺達を、どうするつもりですか？　”監視する”とか

言う為だけに、わざわざ呼んだ訳じゃないでしょう？」

城崎が気遣わしげな声を掛けた時には、浩一は顔を上げて、強い眼差しで十蔵を見据えていた。

無論ですと、初老の経営責任者が静かに告げる。

「――我々は、ラインバレルとそのコアの技術が欲しい」

解析の結果、プロトタイプ・ラインバレルのコアは既存ＩＳのコア同様、その全容は多くが謎に包まれたブラックボックスだった。マキナの技術もＩＳの技術も、現在での科学力では解明出来なかったのだ。

「早瀬浩一君。城崎絵美君――あなた達二人には、我々がプロトタイプ・ラインバレルのデータを得る為、来年度より本ＩＳ学園へ入学して頂きたい」

ファクターとはいえ、男性である浩一が動かせた事を考えると何らかの相違点があるのだろうが、解体して調べた所で、望む結果が得られる可能性は甚だ（はなは）低い。

それは黒い機体や、血液を初めとした二人の各種サンプルから調べ

たDソイルについても同様。

異世界人である為にこの世界での国籍が無いのをいい事にして、二人を実験動物（モルモット）扱いしても結果は同じだろうというのが、この件に係わる大半の者達の意見だった。

「その為に必要な身分などは、この件について通達済みの各国政府の手で保障します。それに――迅雷を所持していた勢力に係わるのは、そちらとしても悪い話ではないでしょう」

あの無人機には、浩一が生まれ育った世界で運用されていたアルマが係わっていた。

つまり迅雷の所有者は、次元の壁で隔（へだ）たれた異なる二つの世界についての情報を手に入れる事が出来ている。

この世界の技術力は、浩一の世界の様に、異世界へ行ける程発達していない。

ＩＳを創り出した篠ノ之博士なら別世界への渡航が可能かもしれないが、彼女は自分が興味を示した人間以外はどうでもいいという社会不適合者である為、協力は期待出来ない。

二人が今までいた世界と、大事な人達の無事を確かめる為には、次元に関する――少なくとも迅雷の情報を確実に持っている謎の勢力に係わるしか選択肢が無いのだ。

何より――彼が”正義の味方”だというのなら、理不尽な世界も、危険な集団も、野放しにはしないだろう。

十蔵は、机の上に山と積まれている書類の束を、浩一に向けて動かした。

「掻い摘むと――我々に協力する見返りとして、ラインバレルのデータ取りが終了し、何らかの形で次元渡航の技術が手に入り次第、そちらの世界とのコンタクトを兼ねて、あなた方を送り返すという内容になります」

「不明な点がある様でしたら、私がお教えします。後になって、話が違うという事が無い様に」

真耶がそう申し出ても、浩一はすぐには首を縦に振らなかった。

「……これは、契約ですか？　それとも脅しですか？」

この世界を見捨てるつもりなんて、最初からない。
それは、自分がそう在りたいものと、自分を信じて願ってくれた者達の気持ちに反する。

だからと言って、今まで不審人物の様に扱ってきた者達からいきなりそう言われても、すぐには踏ん切りがつかない。

城崎が自分にとっての異世界人であると加藤から聞かされた時、少しの間それが気になっていたから、警戒されるのは分かるが……

「脅しです。この条件を呑んで頂けないのなら、お二人の身の安全は保障出来ません」

「――ッ！」

せめて城崎だけでも、と彼女の前に身を乗り出すが、ガードマンの様に一歩前に踏み出した千冬が、それ以上の行動を掣肘する。

「ですが……」

それをやんわりと制止するかの様に、十蔵が言の葉を紡いだ。

「私は、あなた方の意思が知りたいのです」

例え、自分達の意思を尊重出来なくとも。
否応無く此方（こちら）に従うのか。それとも――
それを、この場で自分に見せてくれと十蔵は言った。

「……」

気勢を削がれた浩一が城崎を見やると、彼女は無言で頷く。
後はあなた次第です、という様に。

十蔵も、真耶も、千冬も、ただ待った。
彼がこの対話について、どの様な決断を下すのかを。

「――分かりました。あなた達に、協力します」

千冬以外の三人が頬を綻ばせる中、浩一は不敵に笑い、左の掌を右の拳で打ち据える。
それは決して口だけの軽いものではなく、気概と呼ぶべきものが含まれていた。

「あれがラインバレルなら――どんな敵が来ようが、俺が全部倒してやりますよ！！」

「ほう？　教師部隊共々吹っ飛ぶ危険を冒したというのに、大きく出たな？　”正義の味方”？」

「うッ……！」

真耶を助ける為の無我夢中の行為だろうと、千冬は満足していない。あの状況ならば、起爆するだろうブレードでの刺突より、馬鹿力にモノを言わせて上空にブン投げるべきだった。

それをわざわざ伝える様な真似はしない。
正義の味方とやらを名乗るのならば、その程度は自力で気づいて身に着けて貰う。

「調子に乗らないで下さい！　いくらラインバレルの技術が使われた規格外機とはいえ、稼働率が低い今は、全力には程遠いんですから」

「わ、分かってるっつーの！！　ったく、盛り上がってるトコに水差しやがって……」

更には城崎にまで駄目出しを喰らい、浩一は不貞腐れる様にして頭を掻く。
そして、止めとばかりに十蔵の爆弾発言が待っていた。

「では、こちら全てにサインをお願いします。後程十倍の量をお送りしますので、そちらも」

「えぇーーーーーーー！？」

「早瀬君！　それだけ用意するのに、この方々がどれだけ手間を掛けたと思ってるんですか！」

「け、けど……」

試しに何枚か捲ってみたが、どれも契約書らしく小難しい文面がビッシリと書かれている。

後になって”騙された”という事がない様に、この内容を全て理解してからサインしなければならない。

くっそー……

こんな展開になるなら、石神のおっさんみたく勝手に作ってくれればよかったのに……

「わ、分からない所は私が教えますから！」

「全く……威勢よく大口を叩いておいていきなりこれとは、先が思いやられる」

わたわたと慌てふためく真耶を横目に見ながら、呆れたと言わんばかりにため息を吐く千冬に対し、浩一は剥(むく)れた様な表情を作る。

それを歯牙にもかけず、千冬は少年のある一点を見つめると、ニヤリと笑った。

「態度は大きいのだが……なぁ？」

十蔵以外の四者の視線がそこに集中し、子猫の鳴き声が響いた――様な気がした。

「って！　緒川さんと同じ事言うなよッ！！」

両手で男の急所を押える浩一の姿に、顔を赤らめて俯く城崎と真耶。
それを見て千冬がクックックと声を漏らし、十蔵は人当りの良い笑いを浮かべていた。

そうして。

真耶の助力を借りた浩一と絵美が、契約書地獄との戦いを無事勝利で終えた後(のち)……

（ラインバレル、か）

各アリーナ共通のモニタールームで、千冬は同様に設計されたピット・ゲート前にあるカタパルトの映像に目を向けていた。
男のＩＳ操縦者という事で、初発進くらいは見てみたいと仕事を手早く片付けた十蔵も隣に控えている。

侍の姿をした、黒い異端の近接格闘型ＩＳ――Ｒ３３５『プロトタイプ・ラインバレル』

解析データによると、Ｓシステムや超高度装甲システムとのリンクの他に、操縦者が機体に搭乗したまま、移動元と移動先を繋いだ異空間を渡る事による瞬間移動――オーバーライドをイメージ・インターフェイスで制御する事で任意に行うのをコンセプトの一つとしている。

だが、試作機（プロトタイプ）の名が示す通り性能が低い為、搭載されたカウンターナノマシンによって軽減出来る負担は小さく、連続転送も不可能だ。

その上、今は発動に関してはイメージ・インターフェイスとの接続が未完成であり、感情の昂りに応じて力を発揮するＤソイルのシステムがそのまま使われていた。

他の武装は両下腕部にマウントされた鞘に納められた近接ブレードだけであり、現状では近接格闘型というより殆ど格闘しか出来ない機体と言った方が正しい。

ＩＳコアには意識に似た様なものがあり、その好みによって拡張領域（パススロット）に量子変換（インストール）出来る武装の種類が決まるのだが、学園にあるものを一通り試してみた所、どれも受け付けなかったのだ。

とはいえ、今後も主力武装は刀二本だけという訳ではない。

コアは自ら操縦者の特性を知ろうとし、それによる相互理解によって、機体性能が動かした時間に比例して引き出される。

活動・戦闘経験を蓄えていき、非限定情報共有(シェアリング)によって得られる様々な情報をも自己進化の糧とし、それらを積み重ねると形態移行(フォームシフト)を起こし、外見(フォルム)や性能(スペック)が変化するのだ。

個人設定(パーソナライズ)を適応した”第一形態(ファーストフォーム)”。

経験を積む事で能力を発展させた”第二形態(セカンドフォーム)”。

操縦者との相性が最高値に達する事で辿り着ける”第三形態(サードフォーム)”の三段階である。

単純な推測ではあるが、第一形態(ファーストフォーム)であるプロトタイプ・ラインバレルは、マキナのラインバレルを基にした第二形態(セカンドフォーム)へと移行すると千冬は見ていた。

それによってエグゼキューターが使える様になり、オーバーライドとカウンターナノマシンの性能が上がれば、取れる戦術に幅も出てくる。

単一仕様能力(ワンオフ・アビリティー)についても目星が付いているし、コアのデータベースに記載されていた情報を基にした専用装備を作成する準備も始まっていた。

更識の機体の開発元であるあそこなら、ナノマシンについての技術もある。

後は第三形態(サードフォーム)だが、これについては考えても仕方がない。

名称からして第二形態(セカンドフォーム)へは移行するとしても、既存のコアの様にそ

こまで進化するという保証が無いからだ。
だが、桁違いの出力を誇るSシステムによってスペックは全体的に高められ、特にパワーと反応速度に優れている。
Dソイルによる修復は、装甲だけでなくバリアー残量の回復をも早めており、生半可な攻撃は通用しない。

目下の問題は、早瀬の技量にある。
実戦とはいえ、彼は三次元戦闘の経験が宇宙と地上で二回づつしかなく、攻撃が今だ力任せで動きも雑なのである。
無論初戦闘の頃に比べればマシになっており、場数と精神面の成長もあって度胸は付いているが。

城崎は、父親の天児博士が彼女を巻き込まない様にする為か、マキナ開発を含める仕事内容や政治的立場については別れる直前まで話しておらず、マキナに関する戦闘経験も知識も殆ど無い。
三機の迅雷が無人機であると看破したのも、拡張領域（パススロット）に入っている時、プロトタイプ・ラインバレルから教えて貰ったとの事だった。
言語による会話ではなく、コアからのメッセージが意識に直接伝わるという。

とりあえず、早瀬と城崎にだけでも男性が動かせる理由などを教えて貰う様指示した事もあるが、何故かはコア自身も分かっていない。
無理矢理聞きだされた二人の口から発覚するのを恐れたのだろうか？　鵜呑みにする気はないが……

判明しているのは、マキナのラインバレルのブラックボックスに存在していた拡張領域（パススロット）に、初期設定前の状態で量子化し収納されていた事。
自我が目覚めた際には、既に早瀬が装着しこの世界に来ていたという二点だけだった。

天児博士が死去した今、二人はおろか早瀬の世界の技術者達でさえ、マキナのラインバレルの全てを知っていた訳ではなかった。
マキナのブラックボックスの存在は否定しないが、プロトタイプ・ラインバレルというＩＳの機体と技術――一体何物の手によるものなのか？

それはさて置き――

今は戦闘に関しては心もとないが、城崎には情報処理能力の才があった。
早瀬の世界に来てから緒川結衣に教授されたばかりの段階で、彼女が驚く速さでヤオヨロズの行動パターンを読み取り、一度戦艦フラッグの戦闘指揮を任されてもいる。

早瀬の世界とこの世界で使われている機材が玩具に見える程のＳシステムの処理能力、ハイパーセンサーの補正による高速思考――それらと合わせれば、サポート方面で使える。

とはいえ、現段階ではラインバレルからの指示を受けながらシステム操作を行っているので、即応出来る様十分に知識を覚えて貰う必要があった。
現に先の迅雷戦では、早瀬が目覚める頃には意識を取り戻していた様だが、それからシステムの微調整を済ませるまでに時間が掛かっ

ている。

あの記憶データが真実であれ虚偽であれ、向こうが表向きそういう態度を取るのなら、敵意を見せずに対応しつつ、不審な行動を取らない様警戒を怠らなければいい。
身元不明の相手に対して、比較的人当りを緩くしているのもその為だ。
もしデータ通りの少年少女だとするなら、必要以上にストレスを与えて、ラインバレルの運用に影響が出ても困る。

早瀬浩一と城崎絵美、そしてラインバレル――

この世界に救済を呼ぶ神なのか、破滅を齎す鬼なのか。
それは、自分自身の眼で見極めさせてもらう。

鋭くモニターを見つめるそれは、教師というより戦士としての眼だった。

「もう心を許し始めている様ですな、山田君は。中々良い子達ではないですか」
「気を緩めないで下さい」
否定する様に、ぴしゃりと言を叩きつけた。甘いとも彼女らしいと

も思うが。

「どちらにしても、アレはまだ未熟者です。信頼するには足りません」

初老の男が、小さく忍び笑いを漏らす。

信頼は出来ないと言ったが、信用はどうなのか。
そして、彼女が二人に抱いている感情は期待なのか、それとも不審なのか。

十蔵は、確率が高い方に賭けていると思っていた。

『足元にある、偏向重力カタパルトに両足をセットして、足首と膝、腰を曲げて前のめりになって下さい。射出する際のGが和らぎます』

「はい」

通信で意識に直接届く真耶の指示のままに前傾姿勢を取ると、眼前に『Ｒｅａｄｙ』と表示された空中投影ディスプレイが浮かんだ。
今まではウィンドウでお互いの顔を見ながら会話していたせいか、

浩一はどこか寂しいというか、少し物足りない気持ちになる。

ＩＳ学園には、模擬戦闘などを行う為のアリーナが六つ建造されている。
浩一達がいるのは可動式の屋根を持つ第二アリーナであり、ステージを特殊な遮断エネルギーシールドで隔絶して消音、更に屋根を閉じる事で第三者から目撃されない様にしていた。

プロトタイプ・ラインバレルの性能実験と、入学の際のランク付けを済ませる目的で、今日から生徒の使用時間が過ぎた夜間のアリーナを密かに使用し、真耶と模擬戦を行う事になっている。
ランク付けは本来訓練機で行うらしいのだが、試しに学園に配備されている機体に乗ろうとしてみた所、うんともすんとも言わないのだ。
城崎は、何の問題もなく装着出来たのだが……やはりマキナのラインバレル同様、この機体が特別という事なのだろう。

『推進ユニット・コントロール・システム、シールドバリアー、スラスター出力安定――問題ありません』
その城崎は拡張領域（パススロット）に入り、たった今完了したプロトタイプ・ラインバレルのチェックを行っていた。
学園側の誰かが整備してくれたという事だが、だからなのか、迅雷と戦った時よりも身体が軽い気がする。

『了解――ラインバレル、どうぞ！』

真耶の発進指示と共に、プロトタイプ・ラインバレルの両サイドから立体映像のコースが浮かび、道を作っていく。

「了解っ！」

今回は、邪魔する者は誰もいない。
アルマ生産基地を叩く際、森次の横槍で言えなかった台詞を決める。

「ラインバレル――――早瀬、行きます！」

ディスプレイの文字が『Ｇｏ』に変わった瞬間、カタパルトがレールの上を高速で滑り出し――

シャトルで宇宙に打ち上げられた時に比べたら、どうという事は無いＧを身体に感じながら、浩一は始まりの場所へと飛び出していった。

第０５話　正義への道標　後編（後書き）

次話は少し時間が掛かるかもしれません。

原作・アニメなどで、各キャラのセリフや心理描写を、出来る限り、より違和感が無いものにしたいので。

第０６話　邂逅（前書き）

最近、ＰＳＰゲーム版を時間取ってセリフをメモっていく前に、一度一周クリアして内容を把握してしまおうかと思う今日この頃。
自分の力不足が恨めしい……くそう。数をこなしていく内に腕が上がるはず……

私は諦めない。本編突入まで後１話！

第０６話　邂逅

操縦者に対し最適化（フィッティング）したＩＳは、待機モードとしてアクセサリーの形状を取る事が出来る。

誰もいない第二アリーナ・Ａピット。

浩一は私服（と言っても、サイズを聞いた真耶が城崎のものと一緒に買ってきたのだが）ズボンのポケットに挟んでいたネクタイピンを右手で取り出し、握りしめた。

「来い！　ラインバレルッ！」

右手を突き上げ、いつもの叫びを上げた刹那――

――皮膜装甲（スキンバリアー）、展開。

宇宙作業というＩＳの本分を果たす為、操縦者の全身を包む特殊なエネルギーバリアー。

ネクタイピンを握る右の掌から、薄い膜が肌の上に直接広がっていく。

――スキンアーマー装着、Ｄソイル展開（オープン）。

身体全体から弾ける様に溢れた光の粒子が、放出元へと瞬時に再集結し、纏まったそれが黒い侍の装甲を成す。
展開済みの皮膜装甲（スキンバリアー）と、機体各部のエネルギー・バイパスに固有ナノマシンが配列され、一つのシステムを作り上げていく。

――ファクター体内、エネルギー・バイパス・オペレーティング・システム、超高度装甲システム、皮膜装甲（スキンバリアー）……全リンク正常、Ｓシステム起動。スラスター作動。

全身に力が、活力が漲る全能感。次いで身体が軽くなる無重力感。

――ハイパーセンサー、接続完了。

世界が繊細になっていく様な清涼感が、視界を中心にして全身の隅々まで行き渡り、３６０度全方位が『見える』様になる。
ピット内の機関が上げる唸りが、何処で、どんな波長で発生しているのかが微細に聞き取れる。その音量、照明の光量、正面にあるピット・ゲートまでの距離――数値として意識に浮かぶそうした状況が、まるで見慣れたものであるかの様に意味が理解出来る。

プロトタイプ・ラインバレルを装着した浩一の身体は、ピットの床から数センチ浮いた状態で静止していた。

「……よし。もう、大分馴染んできたな」

浩一は右手を目の前まで持ち上げ、二回握って開いて、感覚を確かめる。

ＩＳの装甲は、鎧の様に身に着けるのではなく、操縦者の身体と融合する様に一体化する。

故に、この世界に来たばかりの時は、この機体をいきなり着けていた自分は化け物になったのかという疑問が沸き起こりもした。

プロトタイプ・ラインバレルというＩＳがどういうものなのか、コアから教えて貰わなければ恐怖心でパニックになっていたかもしれない。

だが、実戦・模擬戦・訓練で黒い侍を動かしてきた浩一は、この機体に対する懸念と警戒心が薄れつつあり、精神的にも馴染んでいくのを自覚していた。

今の自分がこの機体のファクターであるという事実だからなのか、コアから自分に――自分と城崎に力を貸してくれる様な意思を感じている。

マキナという機械に変身したみたいだった今までと違って、自分自身が魔法使いか超能力者になった様な気分だ。

何と言うか、こいつは大丈夫だと安心出来る。

その事を話してみたら、ＩＳに備わっている操縦者の生体機能補助

で、コアが協力している気にさせて利用しているのではないかと疑いを持たれた。
だが、調べたら脳内物質をその様に操作してはいなかったというし、城崎も同じ様に感じているという。

開発された経緯と理由が分からない以上、全幅の信頼は置けないとは思う。
ＩＳを何年も使っているという千冬と真耶には、悪くなっている点は特に見当たらないが、プロトタイプ・ラインバレルもそうとは限らない。

だが、考えても仕方がないだろう。ヤバイ感じがしないなら、とりあえずはそれでいい。
自分達の命を繋げられた機体を、好き好んで嫌いになりたくはないし、どっちみち拒否権は無いのだ。

「さてと……城崎は、まだ来てないのか」
視覚補足拡大映像（ズーム・ビュー）でピット・ゲートの向こう側を見てみるが、いるのはリヴァイヴを装着した真耶だけだった。

この数日間、浩一は真耶からＩＳの訓練を受けつつ、その成果を模擬戦で試すというローテーションを繰り返していた。
マキナの思考操縦機能が使われているプロトタイプ・ラインバレルは、今まで通り、自分の身体を動かす感覚で簡単に操縦出来る。

ただ、飛ぶだけならそれで十分だが、試合や実戦ではそうもいかない。
マキナとＩＳでは、戦い方も身体にかかるＧも違う。
迅雷の時は、城崎のおかげで相手の動きが分かっていたから対処出来たが、一対一の試合でそれをやるのは反則とされたし、彼女が常に傍にいるとは限らない。

模擬戦の結果は、言うまでもなく全敗。

アサルトライフルは削った傍からエネルギーシールドを回復され効かないとみるや、連弾を近距離で叩き込まれた。
距離を取って隙を伺えば、移動・回避先を読まれて手榴弾を投擲される。
未来予知でも出来るのではないのかと、真剣に疑ってしまう。

その真耶は私服姿の浩一と違って、ワンピース型の水着やバレエ選手が着るレオタードの様な格好をしている。

詳しい原理は忘れたが、聞いた話だとＩＳスーツといって、ＩＳはあれを着ていないと操縦者の動きに対する反応が遅れてしまうらしい。痛みは消えないが、拳銃の弾丸なら受け止められるとも聞いている。

らしい、というのは、ファクターである自分と城崎は、体内のＤソイルが同じ働きをするのでＩＳスーツが必要なく、着る前と後で変化を確かめられないからだ。
と言っても、ファクターの場合はどの様に影響するかのデータを採

取する為に着用を命じられているが。

（……や……やっぱり凄ぇ……！）

サイズが合わないせいか、真耶のＩＳスーツは胸元が大きく開いており、訓練の度にそれを意識しては、城崎に叱られるかお決まりの台詞を喰らうかのどっちかであった。
別のピットにいる城崎の方へ意識が向いているのか、全方位視界接続でもこっちに気づいていないらしい。

（うっひゃぁ……！）

思わず視覚補足拡大映像（ズーム・ビュー）でアップにしてしまう真耶の巨乳は、ハイパーセンサーの補正によって、くっきりはっきりとより鮮明に映る。

（も、もうちょっと……もうちょっと、だけ……）

常日頃から煩悩塗（まみ）れという訳では無いが、悲しいかな、彼も一人の十代男子。

スイッチが入り調子に乗った浩一の口元が、うへへ、とだらしなく緩みっぱなしな時……

「〜〜〜〜ッッッッ！？」

気づいた素振りを見せた真耶が、顔を耳まで真っ赤にし、両手で庇う様に胸元を覆い隠して、身体を浩一から見て横に向けた。

（あっ！！　し、しまった……！）

ＩＳを装着してるって事は、山田先生も視覚補足拡大映像（ズーム・ビュー）でこっちを見れるって事じゃないか！

早瀬君はどうでしょう、とこっちを見て気づかれたとしても、全然おかしくない。

『――――最低です』

冥府の底から響いてくる様な声で、更なる追撃が炸裂する。

「ッ！？　き、城崎ッ！？」

解放回線（オープン・チャネル）での通信だった為か、真耶が『えっ？　えっ？』と向こう側のピット・ゲートと自分の方を交互に見やる。

だが、浩一の意識が向いているのは、スーツ共々ＩＳを装着してステージへと出て来た城崎絵美の方だった。

強化外装・六一式『打鉄(うちがね)』。

千冬が専用機として使っていた第一世代型ＩＳ『暮桜(くれざくら)』の基本設計データを基に量産機として開発された、日本産の第二世代型ＩＳである。

刀型近接ブレードを基本武装とする近接両用型であり、火力に難があるが、第二世代型ＩＳ中最高の防御力を持ち、操縦が不慣れで回避行動が取り辛い初心者が扱いやすい。
また整備がしやすい為、訓練機や新武装試験機としても優秀で、多くの企業・国家、このＩＳ学園でも使われ、ラファール・リヴァイヴをも上回る世界第二位の市場(シェア)占有率を持つ。

学園に訓練機として一番多く配備されているのも、この機体だった。

その操縦者である少女が、ゴゴゴゴゴ、という擬音が聞こえてきそうな迫力で、ジットリと睨む。
心なしか目元に影が差している様に見えた浩一が、恐怖で短く声を漏らす。

五十一口径アサルトライフル《レッドバレット》を呼び出(コール)しした真耶が、涙目になって浩一を睨み――

「私だって、怒る時は怒るんですよ！！　早瀬君、お仕置きです！！」

「なぁはーーーーーーーーーーーーーー！！」

二人がかりで滅多打ちにされる浩一の映像をアリーナ・カメラで見た千冬が、重い溜め息を吐くのだった。

「あなたの、ご家族の所へですか？」

「そうだ。学園に入学するまで、あいつと共同生活を送って貰う。私の家でな」

エネルギーシールドに護られていたとはいえ、近接ブレードの刃とアサルトライフルの弾丸をしこたま喰らった衝撃に背中をさする浩一が、絵美に冷たい態度を向けられていると、二人に会いに来た千冬がそう話を切り出して来た。

プロトタイプ・ラインバレルのデータ採取が一段落したので、それを解析している間に交流を深めておけと。

「いいのかよ？　俺達まだ信用されてないんだろ。あんたの家……だッ！？」

族と一緒にして、と最後まで言う事は出来なかった。

千冬が手にした書類の角を以って、浩一の頭頂部、その正中線上を正確に叩いたのだ。

鈍い音の後、両手で頭を抱えた浩一が蹲（うずくま）る。

「心配は不要だ。それよりも、目上の人間には敬語を使え、馬鹿者」

「痛（ッ）ーっ……言われなくたって、普段から使ってるつーの！！俺の記憶、見たんだろ！？」

再度の打撃。舌を噛まないタイミングを狙ったのは、情けというよりも話が進まないからである。

おおおおお、と悶える浩一を見下ろしつつ、千冬は睨みながら命ずる。

「口答えは聴かん。私の事は”織斑先生”だ」

「……分かりましたよ……」

新たに一番痛み出した頭をさすりつつ、浩一は不承不承の体(てい)で承諾し立ち上がる。

織斑千冬――服の上からでも分かる、無駄のない引き締まった体。
そして、まるで狼の様な鋭い目。

見るからに漂わせている厳しさが女らしさを覆い隠しているせいか、浩一と絵美の上司である森次玲二を彷彿とさせる女性だった。
着ているのも、男物と女物の違いがあるとはいえ黒スーツだ。

異世界の人間である二人は、不審に思われない様にと、この世界に関する一般的な知識――白騎士事件などの今まで起きた大きな出来事や、有名店舗名など――も覚えさせられた。
その中には、織斑姉弟に関する情報も含まれている。

彼女は『モンド・グロッソ』という、ＩＳ世界大会の第一回で優勝した無敗の猛者であり、今はこの学園で教職に就いている事。
その弟が、少し前に男性でありながらＩＳを動かし、来年から入学する事が決まっている事も知っている。

二人とは殆ど言葉を交わしていない為、真耶と比べると今はそれ程好意的な間柄ではない。

下ネタでからかわれた一件もあり、思わずタメ口を聞いてしまった

浩一はしっかりと制裁を受け、生真面目な絵美は今から生徒の様に挙手して質問する。

「あの、織斑先生。先程、”弟さんと生活しろ”と言われたと思うのですが」

「ああ。生活の心配は必要ないぞ。あいつは家事は得意だ。任せておけばいい」

「任せる……って、洗濯物もですか！？」

「っ……！」

その意味に気づいた絵美が顔を赤くすると、浩一は食ってかかった。

「いくらなんでも問題でしょう、それは！　普通親御さんに任せ……」

「――――親はいない。私の家族は、あいつだけだ」

その鬼気迫る表情と声音で、二人は理解した。

千冬に――織斑姉弟にとって、家族の話題は禁忌（タブー）であるという事を。

落ち着ける様に息を吐き、千冬は冷静さを取り戻した。

「……安心しろ。あいつは昔から私の服を取り扱っている。今更女の下着くらいでどうこうならん。早瀬」

「あ、はい……」

「あいつ一人なら、個室の用意に一ヶ月はかかったが、お前が加わり相部屋へ入れやすくなった。ルームメイトになる、問題を起こすなよ。それと……」

一切の緩みを持たぬ目に、浩一は思わず息を呑む。

「あいつは未熟者だが、何故か女心を刺激する奴でな」

「は？」

女教師の口元が、人を食った様にニヤリと笑む。

「――油断していると、城崎を盗られるぞ？」

「んなッ！？」

「――っ！」

大口を開けて固まる浩一と、先程とは違う意味で頬を赤らめる絵美。

その二人を横目に見つつ、千冬はクックックと笑いながらその場を去って行った。

織斑家は、千冬が格安で買った中古物件である。

だが、掃除や手入れが行き届いている為、”古臭い”や”ボロい”といった汚い言葉とは真逆の、綺麗な”普通の家”だった。

とはいえ、これからはそれも出来なくなるだろうが……

そう思うと、一抹の寂しさというか、残念さを禁じ得ない。

「はぁ……」

ソファーにもたれかかる千冬の弟・織斑一夏は憂鬱だった。

今から約二週間前。
昨年起きたカンニング事件により、各会場は二日前に通達されるという政府の無茶苦茶なお達しを受けた二月中旬。
何で一番近い所へ行くのに四駅も乗らなきゃいけないんだと文句をこぼしながら、一夏は寒空の下を歩いていた。

私立藍越学園を受験する為だ。

卒業生の九割が学園法人の関連企業に就職する為に、私立校でありながら学費が格段に安い。
しかも地域密着型の優良企業が多く、突然僻地に飛ばされる心配も無い。
そして自宅から近い。彼にとって最高の環境だった。

とある事情で両親がいない一夏は、年が離れた千冬に養って貰いな

がら生きていた。
正直に言ってその事には長年引け目を感じており、昔からやっていた剣道を止めてバイトに励んだのだが、それはお前の小遣いに使えと言われてしまっている。

職業不詳で月に一度しか帰らない姉だが、稼ぎが良いので家計の心配はしていない。
だが、それが無理をさせている様で余計に心苦しい。それで参る様な女ではないと分かっていても。

少しでも楽をさせてやりたいと、中学を出たらすぐに働くつもりでいた。
行ってしまえば、千冬の為と言うよりも自分がそうしたかったのだ。

”社会を甘く考え過ぎだ、馬鹿者”と腕力に勝てず受験生となった訳だが、ここに受かりさえすれば就職は決まったも同然。
春から始めた猛勉強で、模試判定でAを勝ち取っている。普通に受ければ普通に受かる。

そんな訳で大した緊張もなく、試験会場の多目的ホールへと入り――

迷った。

「何だよ、ここは……」

会場は迷路としか思えない分かりにくい構造をしており、何故か案内図が無かったのだ。

どうやって二階へ行くのかすら分からない建物とはいえ、中学三年で迷子は恥ずかし過ぎる。

「……よし、入っちまえ」

俺はこれで大体正解なんだと、次に見つけたドアを開けて中へ入った。

忙しいからか、より神経質そうに見えた女性教師に、”時間が押しているから急げ”とカーテンの向こうで着替える様に指示される。

四時までしか借りられないなんて何を考えているのか、と愚痴っていたが……あの時は、着替えはカンニング対策だろうと考えていて。

――それが何故こんな所に運ばれているのか、疑問に思った。

「ＩＳ……？」

侍が身に着ける鎧の様な機体は、主に跪(ひざまず)く中世の騎士の様に鎮座していた。

自分にとっては意味があるが、男だからただの置物と同じでもある、超技術の産物。

――の、筈だった。

何故かは知らないが、姉がＩＳ絡みの事をとにかく見せようとしなかったから。
隠れてこっそり見た映像に移る織斑千冬が、格好良かったから。

そんな興味本位で触れたＩＳが――

まるで、自分の手足の様に動いた。
知りもしないのに、習いもしていないのに、意識に直接送られてくる情報の全てが理解・把握出来た。
そうしてＩＳを通して見る世界は、まるで――

後になって知った事だが、あそこは公立ＩＳ学園の受験会場で、あの機体はテスト用として使われていたらしい。
藍越（あいえつ）とＩＳの響きが似ているからとはいえ……なんでそんな間違いをしたのか……

あの日を境に、自分の世界は一変した。

――まずマスコミが取材に来て。

「君を知った時は震えたよ。私の前には今、新しい時代が人と言う形を以ってここにいる。たった一人の男が手にした力で、政策が覆（くつがえ）される……だが、世界は綺麗事だけではない。君と、君の力による影響を快く思わない者は、当然出てくる。様々な蠢（うごめ）きが起こるだろう」

「……まあ、そうですね」

自分の立場を脅かされる事を恐れる奴。憂さ晴らしに八つ当たりで

権力を振るう奴……
そうした者達の悪意で、見知らぬ誰か――男だろうと女だろうと――が傷つけられると思うと気に食わないが、一介の中学生でしかない自分に何が出来るというのか。

俺自身、最悪また誘拐されるか暗殺される可能性もあると聞かされている。
だから、俺を保護すると言って来た黒服男達がＩＳ学園の入学書を置いていったんだろうし。

四六時中ＳＰか何かが付くか、どこかへ護送されるかと思ったのだが、そういう特別扱いはこいつが言った様な奴等の不快感を返って助長するという事で、影で護衛するから普通に生活しろと言われた。
今も自宅にいられるし、入学から一週間はここから通えと。

「織斑君……君は焼きが回ったこの世界に、混沌（カオス）を満たす素晴らしき素材だ。世界はこうでなければ……フフハハハハ……！！」

コイツヤバイ！！

――わざわざ各国の大使が来て。

「君は我々にとって希望の光だ。その姿を、この目で見たかったのだよ」

「それは、どうも……」

「男のＩＳ操縦者は、この上ない悲願だった。女性にしか使えない限り、どうする事も出来なかったのだ。そんな時、君が舞い降りてくれた」

……舞い降りたって、凄げぇなオイ。

「織斑君――君はまさしく、世の男性諸氏の天使（エンジェル）だよ」

普通に引いたわ。というか天使って何だ、何か小物臭い言い回しだったぞ。

――他の男達もＩＳを使える様になる為に協力して欲しいと、遺伝子工学研究所の人間まで来て。

「織斑君。君も”何故こんな事になったのか”……”何故こうも理不尽な世界になったのか”と、実に腹正しい思いをして来ただろう？」

「いえ、俺はそうでも……」

そうした苦手な手合いに会った事はあるが、幸い周りが良い人達だったから、それでストレスを溜め込む様な事にはなっていない。

「それが今の世界だ。女尊男卑政策によって、彼等は何の言われも無く貶(おとし)められ、彼女らは与えられた力に惑わされ、本当の自分も、果たすべき役割も知る事が出来ず、ただ流されるままに日々を生きている」

いや人の話を聞けよ。というか、勝手にそう決めつけるな。
俺が男らしくないだの、知り合いが人を見下してる嫌な女だのと侮辱されたみたいで気分悪いだろうが。

「私は、権利に溺れた女性達を不幸だと考えている。どの様なものであれ、手にした力は正しく使えば、どれだけのものを得られるのか分からないというのにね……」

「はぁ……」

それはまあ、俺も思う。何の道理も無く振りかざす力なんてただの暴力だ。そんな事をするよりは、正しく使って全うな人間関係を築く方が良いに決まっている。
けど、今生きてる女が、皆が皆間違った生き方をしてる訳じゃないだろう。ＩＳ関係の力を正しく使う、尊敬出来る人だっているのだ。
現に、自分もそうやって助けられたのだから。
俺が辛い思いをしながら生きてきただろうとか、今の人間達は世界

に負けっぱなしだとか、決めつける様な言い方がどうも癪(しゃく)に障る。

「私はね、遺伝子に通じた自分の能力を役立て、満ち足りた幸福な世界を作りたいのだよ。夢物語だと言われているがね。だが、必ずや実現してみせる」

それは立派だとは思うが、先にそのワンマンさをどうにかしてくれ。自分の考え方こそが絶対だ、って言ってる様にしか見えねぇよ。

「――その為にも、君の生態を隅々(すみずみ)まで調べさせて欲しいのだよ」

お断りだ馬鹿(バカ)。

……何というか、どいつもこいつも目元を黒くベタ塗りしてやりたい連中ばかりだった。

重要人物になったと言うなら、もう少しまともな性格の奴を送れなかったのかと思う。

一夏は、机の上に置いてあるビニール舗装済みのＩＳ学園の制服に目を向けた。

「どうするべきかねぇ……」

とは言っても、学園への入学は既に決まっている。

実姉の手で入学手続きが済まされているし、殺されるだの実験動物（モルモット）扱いされるだのというのは、一夏自身真っ平御免だ。

千冬曰く”普通の高校と大差ない。日々が充実するかはお前次第だ”そうだが……

「女ばっかってのがな……」

友人の五反田弾からは、羨ましいだの良い思いしやがってだのと散々言われているのだが、出来るなら是非とも代わって欲しい。今は彼女作りに興味は無い。

おまけに、優秀な操縦者の卵を保護するという名目で、ＩＳ学園は全寮制。

世界的なニュースになったから、知らない奴扱いというのは多分無いだろうが……学び舎でも住居でも女子オンリーという環境で、気が休まるとは思えない。

ただ女子高へ行くならともかく、そこで三年間暮らせと言われて喜ぶ男はいないだろう、普通は。色々とやりにくくてしょうがない。

「せめて、もう一人いれば……」

気兼ねなく話せる相手が欲しい。

どう接すればいいか分からなくて避けられるとか、生意気だと見下されて嫌われるとかして友達が出来ないのは、普通に嫌だ。

まあ、仮に『ＩＳを動かせる男子』が新しく出てきたとして、そいつが自分と同じ様な思いをするのかと考えるとあれだが……

そこまで考えた時、開けっ放しにしてしまっていたドアから、ガチャリと玄関の鍵が開く音がする。

人によっては泥棒か何かを疑うだろうが、ずっと共に暮らしてきた一夏には、入ってきた者は唯一の肉親だという事が察せられた。

鞄を持ってやろうと重い腰を上げる。

夕食はどうしたのか、まだなら作るが何かリクエストがあったとして何を言われるか――などと考えつつ、一夏はドアの方へと目を向けた。

「おかえり、ちふ――」

ゆ姉、と言おうとしたその口が止まる。

織斑千冬が返って来たのだという彼の予想は当たっていた。

しかし彼女とは別に、二名の来客がいたのである。

それも、自分と同じ年頃の子供という、どういう関係なのかという組み合わせで――

第０６話　邂逅（後書き）

漫画版・アニメ版ではそうではありませんが、真耶のＩＳスーツデザインは原作での描写通りとなっています。
今作での一夏は原作小説・漫画版でのツリ目ワイルド風で、時折ジョークを挟む事はしません。
私のレパートリー的な問題で……（汗）。

第０７話　交流・二人は天然？（前書き）

今回は、最後にアンケートがあります。

第07話　交流・二人は天然？

「一夏、ただいま」

「あ、ああ。で……この人達は？」

返って来た姉にそう尋ねると、来客二名の内、女の子の方が一歩前に出てお辞儀してきた。

「城崎絵美です。宜しくお願いします」

均整の取れた体つきと、丁寧な物腰。ぷっくりした唇と長い黒髪。可愛いか綺麗かで言えば、綺麗という感じだ。

だが、両目がぱっちりと大きく開いていて、口調が柔らかいせいか、可愛さも同時に併せ持っている気がする。

「あ、どうも。織斑一夏です」

「……」

返礼している間も、もう一人の自分と同い年くらいであろう男子が横目でジーッと睨んでくる。

栗毛の髪を短く切り揃えており、顔は童顔。城崎と名乗った少女と対を成している。

「むっ……」
そんな彼に対し、城崎が叱る様に眉根を寄せ、千冬が軽くため息を吐いてから口を開いた。

「こいつは、早瀬浩一だ。学園寮でお前と同室になる」

「同室……って」

「そうだ。こいつもＩＳを動かせる」

「マジか！？　やった！！」
思わず歓喜の叫びを上げる一夏に対し、二人は流石に軽く驚いた。
はしゃぐな馬鹿者、と言いたげな千冬に睨まれ、んんっ、と軽く咳払いをしてから話しかける。

「早瀬と、城崎さんだったよな。俺は織斑一夏。千冬姉がいるから、一夏って呼んでくれていいぜ」

そこまで言い終えると、一夏は右手を差し出し、早瀬に大して握手を求めた。
話の流れからして城崎もＩＳ学園へ入るだろう事は察しているが、彼も十代男子。女、それも同年代へのタッチは出来るだけ避けたいのである。

「これから宜しくな」

「……宜しく……」

握り返してはくれたが、早瀬は相変わらず横目のままだった。

「早瀬君！」

「っ……！」

友好的とは言えない態度を一喝した城崎に、早瀬が思わずたじろぐ。

「この方には、これからお世話になるんですよ！　快く接してくれたのに、ちゃんと挨拶を返さないどころか、そんな失礼な真似をするなんて……」

そこで一拍置き、城崎はこう続けた。

「あなた、最低です！！」

……おおう。バッサリ言い捨てたぞ、この子。

しかし何だ。そこまで言う程かとは思うが……妙に似合ってると思うのは俺だけだろうか。
というか、ただ失礼を怒るにしては感情が籠ってる感じがするんだが……少し顔赤くなってるのがこう、駄目な事だけどちょっと嬉しい的な。
後、早瀬の奴、何で気に入らないとばかりに睨んできたんだ……？
俺何もしてないぞ。

「……それで千冬姉、これからお世話になるってのは？」
「二人は入寮手続きに合わせて住所を引き払った。家庭の事情でな。それまでこっちで預かる事になったが、私はお前達の入学に関して忙しい身だ。お前が面倒を見ろ」
「分かった」

有無を言わさぬ命令口調であったが、いつもの事なので一夏は気にしない。
この件に関しては、寧ろこちらから引き受けたいくらいだった。
今からルームメイトとの親交を深められるし、仲が良くなった女子が同校にいれば後々助かるかもしれない。他の女生徒との付き合い方的な意味で。
「って、え？　何で千冬姉が忙しくなるんだよ。手続きはもう終わってるんじゃ……」

質問には答えず、千冬は振り返るとドアへ向かい、足を止める。
その声音は、出来れば言いたくなかった事であるかの様に一夏には感じられた。

「――――私は、ＩＳ学園の教師だからな」

「……」

そう言い残して去って行った千冬の後姿を、一夏は半ば呆然として見送っていた。

「教師なんてやってたのかよ……」

変な仕事で高収入を得ているんじゃないかと心配したのが馬鹿みたいだ。
家族の自分にくらい言って欲しいと思う。

「……ええと」

何とも言えない空気にバツが悪くなったのか、今までの態度を申し訳ないと反省したのか、早瀬が右手で後頭部を掻きながらぎこちなく話しかけてきた。

「その……さっきは、ごめん。とりあえず、宜しく」

「あ、ああ。こっちこそ」

差し出された右手を掴み、今度こそしっかりと握手を交わすと、今度は城崎が一夏に向き直る。

「色々、ご迷惑をおかけするかもしれませんけど……早瀬君の事を、宜しくお願いします」

「俺は城崎の子供かよ！」

「そう見られるのが嫌なら、さっきみたいな態度を取らないで下さい」

どこか予定調和を思わせるやりとりに、一夏は苦笑するのだった。

向こう側の世界から来るマキナ人間達との決戦。

その最後に意識を失い、気が付いたらＩＳを装着していて、いきなり戦闘に突入。

それでまた気絶し、今度は取り調べを受けてから、休む間もなく新たな戦いが始まり。

何日も勉強と訓練を繰り返し。

そんな慌ただしい時間が過ぎて、ようやく得られた休息だった。

「……」

絵美は、織斑家二階の一夏の部屋にあるベッドを使わせて貰っていた。

本来の使用者である一夏は元々あったもの、浩一は着替えなどと共に持ってきた（ここまでは車で来たのだが、俺が持つよ、と学園側から提供された荷物二人分のバッグを持ってくれた）布団に入り、一階のリビングで眠りについている。

だが彼女は、真夜中になっても寝付く事が出来ていなかった。

（早瀬君の家に来た時も、こんな感じだった……）

浩一が自分のベッドを使わせてくれて、彼は一階で布団を使って…

…理由は違うが、眠れない所まで同じだ。

（あ……）

喉が渇いたので水を飲もうと一階に降りると、そこでは布団から出た浩一が夜空を見上げていた。

はっきりと聞いた事はないが、彼には星や月などに対して思い入れは無いと思う。

浩一が何を意識しているのかは、彼と共に宇宙で最後の戦いをしていた絵美には明白だった。

「眠れないんですか？」

「あ……城崎も？」

「はい。落ち着いたら、これからの事を考えてしまって……」

「そっか……」

浩一と絵美は窓の傍に並んで立ったものの、それ以上話が進まない。

二人がこうした雰囲気で一緒になるのは、三度目になる。

浩一が始めてＪＵＤＡに来て（というよりは、マキナのラインバレルの暴走で意識を失い、気が付いたらそこにいた）から、一度死んだ矢島英明の葬儀場へ送られた車の中。

クーデターを起こした桐山英二の手から逃れる為、衛生兵器破壊作戦（オペレーション・スーパーノヴァ）で浩一と山下サトルを送り届けてくれたジュディ・ブラウン中尉の計らいで、逃亡した米軍横須賀基地に匿（かくま）わせて貰った時。

どちらも今と同じ様に会話が弾む状況ではなく、重い空気をなんとかしようとする浩一の言葉が空回りしている。

「あー……俺、学歴大丈夫かな？」

「大丈夫ですよ」

だって……

あの最終決戦（テルミノ・クレメンティア）で、早瀬君の世界の人達は、異世界の存在を知ったんですから……

そうは思うが、彼が今気にしている事を口には出来ない。

今回も、今までと同じになりそうだった。

「あ、ＩＳ学園って女子高だから、一夏以外女の子なんだよな。俺、戦う姿が格好良いって、速攻でモテたりなんかして……！　なははは……！」

「あなた、最低です」

「うぐ……」

「……」

「……」

馴染みとなったそのセリフで、再び会話が途切れてしまった。
しばしの沈黙の後、結局、浩一が重く口を開く事になった。

「――城崎」

「はい」

「俺、言ったよな。城崎から力を貰った事、何も後悔してないって。
でも……」

あの戦いで最後に起動した、プロジェクトジュダの緊急プログラム
――『ファイナルフェイズ』。

エグゼキューターで次元の歪みを斬り裂く際、ラインバレルのエネルギーが不足する事態を考慮して用意された、フラッグを中継点と

して――グラン・ネイドルの攻撃で撃沈した為、ヴァーダントが代わりを務めたらしいが――他のマキナの全エネルギーを送り込む作戦。

だが、これはあくまでも緊急手段。
実行した場合、エネルギーを送ったマキナはDソイルが完全枯渇し、命を共有しているファクター共々機能が停止する。

絵美はオペレーターとして最終決戦（テルミノ・クレメンティア）に参加していた為にその作戦の存在を知っており、学園側から尋問を受けた際にそれを明かす事になった。
それが、真耶を通して浩一に伝えられたと聞いている。

俯（うつむ）く浩一の拳が、強く握りしめられる。

世界を、そこに生きる人達を護れた事……
それが、無意味な事だとは言わない。

マキナ人間の目的は、自分達の同族を増やす事。
だから、少なくとも人命に関しては甚大な被害は出ていない筈（はず）だとも思う。

だが。

意識を融合したフラッグが爆砕し、実妹（城崎）とちゃんと話し合えなかっ

た加藤久嵩共々、今度こそ死んでしまった石神社長。
力をくれた、仲間であるマキナのファクター達。
勝利を喜ぶには、彼は喪った者が多過ぎた。
戦うのはいい。けど、犠牲を喜ぶ事など出来なかった。

「やっぱり嫌だよ……こんなの……！」

（早瀬君……！）

立派になって欲しいと。
巻き込んだ自分の責任だから、嫌われ役になっても構わないと――
彼の間違いを時に糾弾し、時に諭してきた少女。

その彼女も、最後まで戦い抜いた果てでのこの結末は辛い。
元は自分の世界が招いた事となれば、尚更。
穏和そうな真耶が、尋問や訓練を休む間もなく行う様動いていたのは、これを考えさせない為だったのだろうか。

声が震える浩一に、届けてあげたかった。
後悔していないというなら。あなたは、自分の世界をちゃんと護りましたと。
私との約束を、護ってくれましたと――

だが、千冬から忠告を受けていた。
女の優しさは、時として男を駄目にすると。
辛さの吐露に掛けてやる言葉が、その温もりに溺れさせてしまう事もあると。

「……今のあなたには……私達二人には、新たな力があります。上手く行けば、この世界の不平等を正せるんです。ここに生きる人達を護れるんです。今はそれだけを考えて下さい」

「ああ。分かってるさ」

強くなりたかった。

あの場所で、城崎を護ってやると宣言した時よりも、ずっと。

もう、二度と彼女を失う事が無い様に。
もう二度と、誰かを犠牲にする事が無い様に。

もっともっと、強く……

浩一が、ポケットからネクタイピンを取り出す。

「俺は、この力で……正義の味方として戦う。今は、それだけで充

分だ」

「――もう、眠ります。お休みなさい」

一夏を起こさない様に配慮したが、それでも早めの足取りで、絵美はその場を後にしようとする。

励ましも慰めも出来なかった事を、心の中で詫びながら。

「なあ、城崎」

振り返ると、浩一の顔は今にも泣き出しそうで、情けなくも見えて。

それでも、自分への想いが詰まっていた。

「生きててくれて――本当に、ありがとう」

だから、笑って言えた。

目が覚めたら、いきなり迅雷との戦闘に入って。

その後も色々張り詰めていたから、自然とそうしていた『早瀬君』

という呼び慣れた言い方が。

自分がそうしたいものへと、変わっていた。

「――――はい。浩一さん」

「……」

浩一には寝ていると思われた一夏だったが、実は目を覚ましていた。

自分の後ろで、布団に入りなおした少年へと意識を向ける。

会話の内容からは、何があったのかハッキリとは読み取れない。

けど、ＩＳ学園へ入るのが嫌、という事にしては切実だった。ただ、

弱気を叱咤されるにしては……

（『正義の味方』……）

昔ならともかく、今時はもう使われなくなった名称。

誰かを助けるヒーロー。

その行為は、一夏にとって特別な意味を持っていた。

（五反田達、呼ぶか。二人の歓迎会だ）

早瀬と城崎が多く食べるタイプかどうかは、この際無視だ。多少強引にでも元気付かせる。
残った定食の飯を持ってくるだろうから、何を作って栄養バランスを良くするか……

そんな事を考えている内に、一夏は再び眠りに付いていった。

「一夏って、朝からそんなに食べるのか？」

「朝に一番多く食うのが、科学的にも体型と健康維持に無駄が無いんだよ。その分夜は少なめな」

元は千冬がやっていたのを真似したのだが、試行錯誤の末に導き出

した答えが、これだった。

織斑家での共同生活、初の朝。

浩一と絵美は一夏の食事量に驚きつつ、彼が作る料理に舌鼓を打っていた。
見るからに厳しさ全開の千冬が『任せておけばいい』と言うだけあって、一夏の料理は美味かった。

「凄いですね。私、上手に出来ないから、羨ましいです」

伏し目でそう言う絵美の姿に、浩一は彼女が自宅にいた時、お世話になっていますからと朝食を作ってくれた事を思い出していた。

（そういや……ＪＵＤＡでやった運動会でも、理沙子が弁当作って来たの、面白く無さそうに膨れっ面してたっけ……）

あの時といい今と言い、料理が上手く出来ないの気にしてるのかな？
そりゃ、目玉焼きやベーコンの端っこが焦げてたり、黄身がちょっと漏れてたりしてたけど、別に不味い訳じゃ……

（……！　ひょ、ひょっとして、それって……！）

浩一が胸中で淡い期待を抱いていると、一夏は謙遜する様に笑う。

「俺だって、最初は下手だったよ。千冬姉にも文句を言われたけど……全部食べてくれたからさ。ちゃんとした物出したくて、頑張ったんだ」

そうして、今は家事全般からマッサージまで、姉のお墨付きを得る様になった。

自画自賛になってしまうが、いい家政夫になれるだろう、と一夏は自負している。

ふふっ、と絵美が破顔した。

「一夏さんは、お姉さん想いの良い方ですね」

「い、いや……」

（くぅーーーっ……！）

少し話しただけで、さらっと好感度上げやがって……！

笑う絵美に一夏が照れる光景が面白くなく、浩一は心の中で唸った。

最も、彼もそうして同僚の女子二名の心を掴んだ事を気づいていないので、人の事は言えないのだが。

大口を開けて、箸で掬(すく)った飯粒を拗ねた様に咀嚼しながら、片目を開けて一夏を見る。

（千冬姉、ね……）

一夏くらいの年でああいう呼び方をしていると、こいつシスコンなんじゃないかと思う所だが。

（一夏ん家(ち)って、親との仲が悪そうだしな……）

まだ一日も経っていないが、確かに両親が同居している様には感じられない。
レイチェルみたいに仕事が忙しくて、それが原因でお互い不仲になってしまっているのか。
それとも……

（あぁっ、やめだやめ！　せっかくの飯(メシ)がマズくなる）

気分を切り替えようと、浩一は自分から話題を振る事にした。これは是非とも頼みたい事でもある。

「一夏って、ＩＳの知識を一通り覚えてるんだろ？　俺も城崎も、まだよく分からなくてさ。学園に入る前に、教えて欲しいんだけど

……」

「ぁ……一夏さん、私からもお願いします」

浩一がＩＳの勉強を自分から言い出した事が嬉しかったのか、口調が僅かに弾んだ絵美も同様に頼む。

入学前に参考書を渡された二人だが、電話帳サイズのそれを理解するには至っていない。

レイチェルや牧なら涎(よだれ)ものだろうが、浩一は昔から勉強を不得手としており、父と違い技術者ではない絵美もスラスラとは行かなかった。

きょとん、と言う風に一夏が瞬きをする。

「俺、ＩＳの事全然知らないぞ。千冬姉が何も見せてくれなくて」

「「え？」」

浩一は疑問で、絵美は意外で、二人の声がハモる。

「じゃあお前、何で参考書捨ててたんだよ？」

「え！？　マジかよ、そんな覚え無いぞ！」

浩一の質問に、一夏は慌ててリビングのゴミ箱へと向かう。
チェックすると、そこには確かに、必読と書かれた参考書が捨てられていた。

「これ捨てるくらいだから、もうＩＳの事は一通り分かってると思ってたんだけど……織斑先生の弟って聞いてたし」

やっちまった、と一夏は右手で頭を抱えた。

「古い電話帳と間違えてた……」
「私も、必読って書かれるくらい凄い電話帳だと思ってて……」

「はぁッ！？」

信じられない、と浩一は大口を開けた。
城崎にそういう所はあるけど……こいつもかよ！

「そんな電話帳があるか！」

――正午になった頃。

「おーっす、一(いち)かああぁぁぁぁぁぁぁっ！？」

結局一から勉強する事になった三人が参考書と格闘していると、ドアを開けてリビングに入ってきた（そろそろ来るだろうと玄関の鍵は開けられていた）少年が素っ頓狂な声を上げた。

赤みがかった長い茶毛に黒いヘアバンドを巻いた、一夏の友人・五反田弾である。

「？」

自分の方を見て驚いた弾の姿に絵美が小首を傾げる間に、一夏は首根っこを掴まれて部屋の隅まで引っ張られていた。

抗議の声を上げる間もなく、弾が顔を近づけてひそひそ話を始める。

「お、おい一夏！　誰だよ、あの無茶苦茶綺麗で可愛い人！」

「え？　誰って、城崎さんだけど」

「名字だけ聞いてるんじゃねぇよ！　まだ入学前だってのに、何で家に上げられるくらい女子と仲良くなってんだ！　さっそくモテ期効果使いやがったかこの野郎！」

「な、何だよ！　学園に入る前に泊めてるだけだって！！」

「「――――――――――ッッッッッッッッ！！」」

思わず大声になったその言葉に戦慄を走らせたのは、弾だけではなかった。

弾が入って来たばかりの玄関から、どさり、と何かが落ちる音がして、四人はそちらを振り返る。

そこにいたのは――

「一夏さ……入学前から……同せ……」

足元に色々な料理が詰まったタッパーが入っているバッグを落とした、弾と同じ色の髪を、こちらは薄紫色のヘアバンドで巻いている少女だった。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーんっっ！！」

「ら、蘭？　お、おい！　待てよ、らーーんっ！」

泣きながら一目散に駆け出した少女を、一夏が追っていく。

後に残された者の内、浩一が呆然と呟いた。

「何だありゃ……」

その後誤解が解かれた事で、昼食の歓迎会は無事開催された。

一夏は本来、もう一人の男友達である御手洗数馬も呼ぶつもりだったのだが、彼は外せない用事があるという事で来ていない。

「落ち着いたら、家の食堂にも来てくれよ。残り物と違って、出来立ては無敵の味がするぜ」

「お兄、その言い方やめて。何か小物臭い」

「小物！？」

わいわいと騒がしい中、一夏は絵美のご飯茶碗に乗っている、残り一個となったカボチャの煮物が目に入った。

「お……」

嫌いとまでは言わないが、これは正直に言ってかなり甘く、出来れば改善して欲しい一品だ。

だが、ここ数日で色んな人間の相手をして疲れていたからか、それで最近五反田食堂へ行けてなかったからたまにはと思ったのか、食べたくなってくる。

「城崎さん。カボチャの煮物、一口くれない？」

「「ぶはっ！？」」

「えぇッッ！？」

飲み物を毒霧の如く噴き出しそうになった浩一と弾だったが、それはどうにか押し留めた。
蘭が驚きに声を上げるが、同じ女子である絵美はけろりとしていた。

「はい、いいですよ」

「あああああぁぁぁっっ！！」

「ちょ、ちょっと待てぇ！！」

箸がご飯の上のカボチャを掴んだ所で蘭が悲鳴を上げるが、それをも上回る大声を出した浩一が、バン、とテーブルを両手で叩いてストップにかかった。

「浩一さん？」

「どうしたんだ、早瀬？」

何故止めたのか分からないという風な二人に、浩一は疲労を感じながらも説明を試みる。

「あ……あのなあっ！　付き合ってもないのに、女の子が食べたの欲しいとか言わないだろ！　普通にセクハラだっつーの！！　城崎も断れって！」

（ナイス、早瀬さん！　そのまま！　そのまま止めて！）

（よかった、こいつはまともだ。少なくともツッコミ属性だ）

だが、浩一の熱心な叫びを聞いた二人は怪訝な顔をした。

「何言ってんだよ、早瀬。口付けたとこを貰う訳ないだろ」

「一夏さんがそんな事をすると思うんですか？　五反田さん達もいるのに、いきなり変な事を言わないで下さい」

子供を窘(たしな)める様な口調でそう言うと、絵美は手にした箸でカボチャの煮物を二つに割き、口が付いていない方の切れ端を、どうぞ、と一夏のご飯茶碗の上に差し出した。

自分が口を付けた箸で、男に。

（あぁぁぁぁーーーー……）

自分の箸で撮(つま)んだカボチャをむぐむぐと咀嚼する一夏の姿に、無念と悲嘆で蘭が涙目になる。
見た感じでは、一夏に異性としての好意を抱いている様には見えない――自分が一目惚れだったから、昨日会ったばかりでも油断は出来ない――のだが。
想い人が女子と間接的に唇が触れ合うのを見るのは、恋する乙女にとっては無情な仕打ちである。

浩一は力尽きたかの様にガックリと項垂れる。
ここまで来ると、嫉妬を通り越して疲れがドッと出てきた。
ＩＳの勉強はアテが外れ、二人はどっかズレていて……

（こ……こんなんで、これから大丈夫なのか……）

入学前から、別の意味で心に暗雲が立ち込め始める浩一の肩を、頑張れよと言うかの様に弾が叩くのだった。

そうして。

三人は、ＩＳ学園入学の日を迎える――

第０７話　交流・二人は天然？（後書き）

”浩一は昔から勉強を不得手としており”の文は、ＤＶＤ一巻の初回限定ドラマＣＤとＤＶＤ二巻のピクチャードラマ『うたれたタマ』（レンタルだと見れません）が元ネタです。
原作だと優等生ですが、アニメ版では赤点常習犯らしく部活もやってないとか。

あのピクチャードラマは『何故これを本編でやらなかった』というエピソードで。
アニメのみ見てると、矢島との比較だけで１話の頃になった様な印象ですが、本当は何とも苦い思い出が……

アンケートですが、次回は以前活動報告に書いたＯＰ集を書くか、入学・セシリア編を書き始めるか（構想は既に出来ているのですが、序章が終わってキリが良いかなとも思うので）という二択です。

ＯＰ集は、利用規約違反なので歌詞は書かず、曲名も避けて情景描写だけで書きますが……一部に、決定事項ではなくノリで考えたり（出す可能性はあります）、未定シーンもあるので抜けている個所もあったり。
無論ネタバレを含むのですが、元々アニメのＯＰって少しはそうだと思うし……うーむ。

投票方法は、この作品への感想欄及び”７話を更新した”という内

容の活動報告への記述とメッセージボックスで。

期限は、今から一週間後の１２月３日までとします。

よーやっと本編へ突入です。これからも宜しくお願いします。

ＯＰ集（前書き）

釋廉慎さんより『キリが良いのも確かなのでやってもいいと思う』という意見を頂いたので、このＯＰ集を投稿する事に致しました。

利用規約違反なので歌詞は書かず、”問題になりにくい”との事なので曲名も避けて情景描写だけで書きました。

一部に、決定事項ではなくノリで考えたり（出す可能性はあります）、未定シーンもあるので抜けている個所、詳細に決まっていない個所もあります。

シーン構成は、色んな既存作品を参考にしております（ガイドライン通り、ちゃんと自分の文章で書いております）。

ＯＰ集

その１、使用曲：アニメ版『鉄のラインバレル』ＯＰ曲

アニメ版『鉄のラインバレル』ＯＰの様に、炎が燃え盛る中で燃える左三つ巴が回りタイトルロゴが出る。文字のデザインは『鉄の』がアニメ版ラインバレル風、『ストラトス』がアニメ版ＩＳ風。

ＩＳ版ラインバレルを装着した浩一が、ゆっくりと左下腕部の鞘から抜刀していく近接ブレードの刃がアップになり、それを一気に抜き放って所謂”サンライズ伝統のポーズ”な正眼構え。

（この間未定）

（ノリ書き）燃える瓦礫の町の中、立ち尽くす一夏と箒。強い決意で走り出す一夏を箒は止められず、いつの間にか紅椿を装着しても俯いたまま動かない。

箒以外の一夏ラバーズが登場。

１：各国の国旗を背景に、各専用機の待機状態が出る

２：それぞれＩＳを装着し、アニメＤＶＤ／ＢＤの６巻設定資料集の３Ｄモデリングのポーズ（簡単に説明します）、その後ろで装着

前の彼女達がアニメ公式サイトのＰＣ壁紙でのポーズ（箒が中心で腕組みしているもの）、背景として学園の各地――をそれぞれ一回。詳しくは下記。

一番・ラウラ。場所はアリーナ、モデリングポーズは半身で左腕を水平に

二番・セシリア。場所は教室、モデリングポーズは右手に《スターライトｍｋｌｌｌ》を持ちつつ、左腕を開いて肩まで掲げる

三番・シャル。場所は寮の部屋、モデリングポーズはシールドごと《灰色の鱗殻（グレー・スケール）》が付いた左腕を肩まで掲（かか）げる

四番・鈴。場所は食堂、モデリングポーズは連結状態の《双天牙月》を右手で上、左手で下を斜めに持つ

アリーナのモニター・ルームへ。中心で腕組みをして笑う千冬、その右隣に書類を抱えて笑う真耶。左隣には柔和に笑む十蔵。

生徒会長室へ。座席に座る楯無が『我最強成』と書かれた扇子を口元にやり、にんまりと。その左隣に虚が、右隣にのほほんさんが５巻４９ページみたいな感じで立っている。

五反田食堂前へ。入口は『蘭ちゃんファンクラブ同盟』の五人がポーズを決めて塞（ふさ）ぎ、その前に中華鍋を右手で肩に担ぐ厳。蓮と蘭は入り口前の青いベンチに座り、画面左端に笑う弾。

（一部ノリ書き）黒い新型迅雷の顔がアップになり、ファクターアイが浮かぶ。右手を高々と上げると同時に画面が引いて、背後にいた新型迅雷五七機が映り、海から急浮上する様にカガセオが出現。その上空を飛行形態のプリテンダーが飛んでいく。

曇（くも）る街中でのアクションシーン。セシリア、鈴、合間として愛嬌があるポーズを取る楯無とそれに呆れる簪、シャルル、ラウラの順。

次いで、弾幕を抜けつつ、【零落白夜】を発動した《雪片弐型》を、デスティニーのアロンダイトの様に突き出す一夏。

次いで、拡張領域（バススロット）内のコックピットで吠える絵美のファクターアイがアップになり、引くと浩一の顔になる。飛行しつつビームが噴き出す《エグゼキューター》を左、右と振りかぶり、吠えつつ天高く上げる。

両腕部・両脚部放熱システムから放熱の赤い粒子が吹き出し、《エグゼキューター》の銃口から長大ビームソードが迸り、それがアップになると画面が白色化。

画面が上がるように、白色化が雲となり上空の青空へ。右から白い迅雷、タリスマン、飛行形態のプリテンダー、カガセオが飛んでいく。

抜刀される近接ブレードの刃がアップになり、画面が引くと右手にブレードを持ち飛ぶラインバレルの姿が映る。

画面の左側からセシリア、上から簪、右下の雲からラウラが出る。

（ノリ書き）長剣を呼び出ししした、ファクターアイが浮かぶ黒い新型迅雷と一夏が上空で何度も斬りあう。

次いで福音の顔がアップになり、引いて上空を飛ぶ全体像が出る。右に横回転しつつ《《銀の鐘》両翼から羽弾が掃射され、浩一が《エグゼキューター》から刀身の様に出る通常サイズのビームで、飛び上がりつつ斜めに切り上げ、次いで降下しつつ振り下ろして切り払う。

《エグゼキューター》の銃口がアップになり、ビームが勢いよく噴き出る。引いて全体像が出ると同時に、両腕部・両脚部放熱システムから放熱の赤い粒子が噴き出しつつ、《エグゼキューター》を振りかぶる浩一の姿が映り、振り下ろされると同時にビームソードが真っ直ぐ放出され画面が白色化。

白色化画面がラインバレル待機状態のネクタイピンとなり、浩一の右手がそれを掴む。
アニメ版ＯＰの様にガッツポーズをする彼の隣に主要メンバーが並び、背景はＩＳ学園の正面ゲート。

これで終了。

その２、使用曲：『機動戦士ガンダム００』２ndシーズン２～１３話ＯＰ曲

こちらは殆どノリ書きなので、構成は元ネタの物が多いです。シュヴァルツェア・レーゲンはランスロットの様な全距離タイプなんですがね……
一部のキャラの扱いが悪くなってしまいました。ファンの皆様申し訳ありません……

アニメ版ラインバレル一話の、神社にいる浩一にマキナ版ラインバレルが落下するシーン。

（この間未定）

二四話で、ファクターアイを発現させた浩一がハブ・ダイナモをぶった斬るシーン。

青空でのＩＳ戦闘をバックに、真っ直ぐ立って画面右を見据える浩一と、胸元に右手を添えて画面左を向いている城崎の姿が映る。

（この間未定）

（ノリ書き）宇宙。ボロボロの白式第二形態・雪羅を装着し口元から血を垂らしている一夏が、険しい表情で弾幕を突破していく。箒が涙目で右手を伸ばす姿がアップになっていく。

（前半未定）ラウラが眼帯を外し、露（あらわ）になった『越界の瞳（ヴォーダン・オージェ）』がアップになる。

（この間未定）

（前半未定）自宅の屋敷前でセシリアがアップになりつつ、片目を瞑（つむ）って笑い、『ＢＡＮＧ！』と指で射撃のポーズをし、カメラが上空へ。

暗くなると画面が引いて、黒い瞳の部分から浩一の顔、次第にラインバレル装着時の全体像になる。画面左へ飛んでいくと同時にその上位置に画面右側から来たセシリア、浩一と同位置の簪、その下位置からラウラが姿を表し、カメラが引くと同時に画面左奥へと四人が飛んでいき、タイトルロゴへ。

（ノリ書き）ＩＳ学園の廊下。画面右で歩きながら箒が俯き、次いですれ違った一夏がその方を見やるのがアップに。

（ノリ書き）背を向けて対立する両親の中央から鈴の姿が出て、左を向いて流し目をする顔がアップに。

（ノリ書き）気泡が浮かぶ暗い海のイメージ。アップになるシャル

ロットの虚ろなその両目それぞれ実母と実父の姿が浮かび、その中を落ちていく姿が女の子の服から男物のＩＳスーツへと変わっていき、画面が暗くなる。

ドアが開く形で光が差し込み、軍服でシュヴァルツェア・ハーゼの施設に入るラウラの後姿が映る。黒ウサギ隊の面々、最後はクラリッサが敬礼し、カメラが上方向から徐々に下がりつつラウラの顔が映る。

（ノリ書き）どこか洋風な町で噴水の傍にいる楯無が上を見上げると、そこには真っ直ぐ前を見据えて飛ぶ簪の姿が映り、その凛々しい顔がアップになる。

（ノリ書き）私服ワンピースのセシリアが、両親の墓の前で帽子を押さえて頭上を見上げると、そこにはマキナのラインバレルがテールスタビライザーを広げて飛ぶ姿が。次いでコックピットにいる、ＪＵＤＡ制服姿の浩一と城崎が地上にいるセシリアを見やる。

（ノリ書き）アニメ１１話で出てきた相互意思干渉（クロッシング・アクセス）（恐らく）空間で涙を流しながら右手を伸ばす箒が、ＶＴシステムの様な泥に迫られる。一夏が必死に右手を伸ばすが、あと一歩で箒の右腕が泥に呑まれてしまい、互いの手が引き離されるのがアップになる。

（ノリ書き）浩一が険しい顔で、ラインバレルの両下腕にある鞘から交差する様に近接ブレードを抜いて二刀流になる。白い迅雷がス

ラスター底部の鞘から近接ブレードを右手で引き抜く。
互いに斬りあうが、浩一による右の近接ブレードでの切り上げで迅雷のブレードが弾き飛ばされ、すかさず降下しつつの左の近接ブレードによる斬り下ろしで迅雷がやられる。浩一は無反動旋回（ゼロリアクト・ターン）で身体を反転させつつ、右スラスターにマウントしている《エグゼキューター》でもう一機の迅雷を撃破、彼が画面右奥に向かうと共に、イメージ・コックピットにいる城崎の姿が映る。

（ノリ書き）青空の下、セシリアがブルー・ティアーズ発展型から多数のミサイルを、簪が《山嵐》を撃つ。

（この間未定）

（ノリ書き）ＩＳ装着済みのマドカが口元を邪悪に歪めるのがアップになり、画面が引くとサイレント・ゼフィルスが射撃型ビットを飛ばしてくる。レーザーの網の目をシュヴァルツェア・レーゲン発展型を付けたラウラが抜け、反転して広範囲ＡＩＣを放つが、上に飛んで躱したマドカが反転してラウラへと向かい、嗤うその顔が再びアップになる。

（ノリ書き）鈴が横回転しながら甲龍発展型の衝撃砲を放ち、彼女が画面左の方へ引くと、映ったセシリアがライフルとビット複数基の同時狙撃を行う。

（ノリ書き）ＪＵＤＡ社長室で、特務室＋理沙子と道明寺のメンバ

ー。

（ノリ書き）宇宙。アラクネ装着のオータムが咆哮しつつ、腰部装甲からカタールを両手で抜きつつ飛ぶ。

（ノリ書き）学園グラウンドで千冬と真耶、生徒達。

（ノリ書き）ｍｏｄｅ（モード）－Ｂ（ビー）とファクターアイを発現させた浩一が、両腕を交差する様に近接ブレードを抜き、二刀流で向かっていく。

（ノリ書き）青空の下で、一夏ら主要メンバー。

（ノリ書き）互いに一回転しつつ、近接ブレードと備え付けた脚部ブレードが斬りあってスパークを散らす。

（ノリ書き）宇宙に浮かぶ地球の姿が映り、終了。

第０８話　クラスメイトは殆ど女（前書き）

書いていたら空白抜きで１００００文字を超えた……

第０８話　クラスメイトは殆ど女

特務室社員寮――マキナとファクターに係わる人間専用の建物。
数十万円の特注スーツに身を包んだ浩一は、その二階にあるカフェテラスで、窓の外にあるモノを静かに見据えていた。

遠く離れた所に見える、曲がりくねった塔を。

「ありがとう」

――聞いたよ、早瀬君。あそこへ行く時が遂に来たそうじゃないか。

寡黙な寮の管理人が持って来てくれたコーヒーを飲んでいると、知っている男の声がした。
だから顔を確かめる事はせず、浩一は窓の外を見据え続けて応答する。

「ああ、遂にこの時が来たんだ。俺の正義を実行する時が」

――その気概は買うが、しっかりと想像したのか？

え、と顔を正面に向ける浩一の眼には、春だというのに白いボアコートを羽織った男が向かい側の椅子に腰かけていた。
窓から差し込む日光に隠れて、その顔は見えなかった。

――織斑君がいるとはいえ、うら若き乙女の園に異分子として入り込み、奇異の目で見る彼女らと学生生活を共にする……

そこまで言うと、男はふっ、とニヒルに口元を歪ませた。

――その息苦しさが、君に想像出来るかね？

「あんなん想像出来るかあぁぁぁぁぁぁぁぁっっ！！」

「うおっ！？」

力の限り叫んだ浩一に驚いて、隣のベッドで寝ていた一夏が飛び起きた。

「……」

両目を開けて最初に飛び込んできたのは、電気が消されて部屋が暗い為にうっすらと見える、椅子と備え付けの机に棚、端末と二つのディスプレイ。

右を向くと、そこには備え付けテレビ。
左には、窓側のベッドに寝ていた一夏が身を起こして、驚いた顔でこちらを見ている。

「あれ……あれ？」

「あれ、じゃないだろ……何なんだよ早瀬！」

さすがに叩き起こされた文句を言ってくる一夏の言に、浩一は先程見た光景が何なのか思い出し始めた。

社員寮のカフェテラス。そこで、このＩＳ学園の中央タワーを見ていて。
さっきの男は、一度あそこで話した――

「……」

違う世界の建物がごっちゃに、って……
ホームシック……って言うのか、あれ？　つか、何でいきなりテラ

スであいつの夢なんだよ……

「早瀬？」

何とも言えない顔をしていた浩一が、どうしたんだよ、と訊いてくる一夏に対して口を開く。

「前にいた世界（トコ）の夢、見てさ」

「……そっか」

予め作られたカバーストーリーを聞かされている一夏は、同じ様な表情で押し黙った。

「ごめん、起こしちゃって」

「いいって」

何となく少し落ち込み始めた空気を振り払うかの様に、これ位何でもねぇよ、と一夏は笑った。そのままもう一度ベッドに横になる。

「それより早く寝ろよ。寝坊なんてしたら千冬姉に殺されるし、授業もあいつの相手もキツいだろ」

そこまで言うと、一夏はどこか人が悪く不敵な笑みをニヤリ、と浮

かべた。

「――負けんなよ」

「――へっ。正義の味方が負けるかよ」

ふっ、と笑って返した浩一は、付き合い始めて一ヶ月になる友の発破に感謝した。

起こした身を勢い良く後ろに倒して、再びベッドに横になる。あの社員寮の自室にあった物よりも寝心地がいい。

両手を頭の後ろで組み、真っ直ぐ天井を見据えて、今日の朝から起きた出来事を回想する。

（……初日から、大事（おおごと）になっちゃったよなぁ）

ＩＳ学園生活での初日。

それは、予め想像していたものを凌駕する程の、居心地の悪さから始まった。

（これは……想像以上にキツい……！！）

――いや、自分はまだいい方だ。

一夏は、後ろの隅っこにいる早瀬へと視線を向けた。
一ヶ月前から同じ釜の飯を食ってきた少年は、腹でも壊したかの様に顔を青ざめさせている。
遠い上に机が邪魔をしてよく見えないが、本当に手を添えているかもしれない。胃の辺りを。

（女子生徒達への発表、入学式前日までやらなかったって言うからな……）

『世界で最初にＩＳを動かした男子』である自分にも、好奇の視線は注がれている。

珍しさというのもあるだろうが……唯一ＩＳ関係者の育成を行うこの一校に入学する為の事前学習を授業に取り入れている学校は多く、ＩＳがこれまで女性にしか動かせなかった以上、当然それらは全て女子校。
そこにいた彼女らの殆どは、男に対して免疫がないのだろう。

しかも、座る事になったのは中央かつ最前列という嫌でも注目される位置。
席がここだと知った時は、視線攻撃の殆どがこちらに集中する事を覚悟したが、その大半は当初の推測通り早瀬へと向かっている。

そんな今でさえ、別に何もしていないのに悪い事をしている様な、居た堪れない気分になるのだ。
彼の負担は推して知るべし。あのまま胃潰瘍になるんじゃないかと心配になってしまう。
いや、多分なっても回復するのだろうが……

ちなみに、城崎は右端の席からそんな早瀬を心配するかの様に真っ直ぐ見つめていたが、彼が助けを求める視線を寄越そうとすると、しっかりして下さいと目つきをキツくする。

たまに見る自分の方にも、”甘やかさないで下さいね”と言わんばかりの厳しい視線が送られ（どっちにしろ、『安心しろ、俺が付いてる』的な余裕は無いのだが）、こっちに助力を求める早瀬を力強く頷（うなず）いて元気づける事になった。この想いが届いていると嬉しい。

自分達三人のクラス座席の位置を天頂から俯瞰して図にするとこう

で、見事にピラミッドを形成している。

・↑俺

・↑早瀬　　・↑城崎

「……ら君。織斑一夏くん！」

「は、はい！」

慌てて声を出すと、気が付けば、目の前には副担任の山田真耶先生。童顔の眼に掛けられた眼鏡は、位置が若干ズレていた。黄色地に黒をあしらったワンピースはだぼっとしていて、ここにいる女子生徒の平均と変わらない身長がますます小さく見える。どっちもサイズが合ってないのだろう。子供が無理をして大人の服を着ました感がバリバリだ。

上ずってしまった返事に対する女子達からのくすくす笑いに落ち着かないでいると、大きな声を出してごめんなさいだの、怒ってるかなだのごめんねごめんねだのと、山田先生がぺこぺこと頭を下げてきた。その度に眼鏡がずれ落ちそうになる。

「自己紹介してくれるかな？　だ、駄目かな？」

「いや、そんなに頭下げなくても……しますから、自己紹介しますから」

「ほ、本当ですか？　本当ですね？　約束ですよ！　絶対ですよ！」

――と請け負ったのはいいが。

（うっ……！）

背中に受けていたのと、真正面から受け止めるのとでは、視線に対する精神力の消費量が違った。

後ろを向けない早瀬はこれに直撃する羽目になっていたのか、と心配事が増えるが、今はそれに気を向けている余裕は無い。

「え、ええと……織斑一夏です。宜しくお願いします」

しっかりと立ち、規定事項の様に頭の下げ上げを終えた一夏はプレ

ッシャーが増大した。
これで終わりでは物足りない、もっと喋って欲しい、と視線に込められた力＝注目度が増したのだ。

（まずい……ここで何か言わないと、”暗い奴”のレッテルを張られてしまう）

ぐぐぐ、と歯を食い縛って懊悩（おうのう）する一夏。
この時、一杯一杯だった彼はドアが開く音に気付かず、また両目を瞑（つむ）っていた為、そこからの来訪者へと女子生徒達の視線が向いている事も知らなかった。

一度やると言った以上、男として退く訳にはいかない。
それに、最初で溝を作るとこの環境に馴染めそうもない。

一夏は息を短く吸って吐き、意を決して宣言した。

「以上です！」

直後、思いっきり銅鑼（どら）を叩く時の様な深い音が響き、背後を取っていた千冬の鉄拳を喰らった一夏が両手で頭を押さえて悶（もだ）える。

「自己紹介もまともに出来んのか、馬鹿者」

「……千冬姉、いたのか……」

追撃の出席簿による殴打、否、最早唐竹割りの領域に入る一撃。精確に頭頂部を狙撃され、一瞬白目になった一夏は、激痛に耐えられずその場で崩れ落ちた。

「学校(ここ)では織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生……」

このやり取りの後、クラスメイト達の黄色い声が爆音と化した。

ＩＳ界トップスターである姉の登場と、自分がその弟という事に大興奮したのは分かるが、信じられない事に、彼女らはこの音の暴力をハッキリと聞き分ける事が出来ていたらしい。”でも時には”どうたらの後で、誰かが”そして”こうたらと続けていた気がする。

自分の様な一般人は勿論、ファクターの二人でも無理だろう、と一夏は思った。

（お前はいいよな……話題があるんだから……）

あ行の生徒から始まる自己紹介が進み、絵美はそつが無く終了。羨望と疲労、心配と応援が入り混じった視線を一夏から向けられている浩一が、処刑台へと上る番が来ていた。

「……ど、どうも……早瀬浩一……です」

声はぼそぼそ、冷汗はダラダラ。手を組んで立っていた千冬が、その様（さま）を苛立たしく思い指を上下させる。

千冬の登場というインパクトがあったものの、一夏の自己紹介が味気なく終わった為、女子生徒達は浩一から与えられる情報と刺激に飢えていた。その両目がギラギラと輝いている。

「ええっと……俺が、何でこの学校に入れたかというと……」

「早瀬の身体には――」

「えぇっ！？」

そっちが話すのかよ、と浩一が狼狽した。それを言われたら話題が無くなってしまう。
しゃきしゃき進めんお前が悪い、とばかりに、無情に説明を始める織斑千冬。

「ドレクスラーソイルという、男がＩＳ操縦を可能にする為の特殊ナノマシン群が移植されている。だが、稼働させられる時間が不安定な上に、万人に一人の適性が必要でな。無用な期待を抱かせぬ様にと今まで秘匿していたが、安定稼働が可能になった為、こうして入学した」

「先生。そのナノマシンの開発国は、やはり日本なのですか？」
生徒の一人が、先程までとは打って変わって、真剣な表情で挙手した。
千冬が入室してからのやり取りだけを見ると、ただのミーハー集団に見えてしまうが、彼女らは一万を超える倍率を勝ち抜いてきたエリート学生である。

「事が事だからな。アラスカ条約加盟国全てによる合同プロジェクトだ」

教室が一気に騒がしくなると、千冬がぴしゃりと一喝する。

「静かに！　話の続きは、一時間目の授業が終わってからにしろ。山田先生、ショートホームルーム（SHR）の続きを」

「ねえねえねえねえ！！　早瀬君のネクタイピン、それ専用機だよね！？」

「男が動かせるから、やっぱ第一世代？　それとも第二？　まさか第三！？」

「あ、えっと……第三世代、だけど……」

休み時間が始まるなり繰り出された女子の質問攻撃に、浩一はたじろぎながらも答える。

参考書を用いての一ヶ月掛けた予習の成果として、ある程度はＩＳ関連の知識を覚えていた。

ＩＳの世代は、第一から第四まで定義されている。

一ＩＳとしての完成を求めて作られた第一世代型。

様々な武装による多様化を目指した第二世代型。

現在、搭載した特殊な兵器の試験機である第三世代型。
今は机上の空論である、あらゆる状況に即座に対応出来る万能機の第四世代型。

質問した女子生徒の一人は、『ドレクスラーソイルというナノマシンを用いた、男性が操縦出来るＩＳ』として創られた第一世代型なのかと訊いたのだが、返って来たのは想像していた中で最高値の回答だった。

「うわ、超ＶＩＰ（ビップ）じゃん！」

「つまり、各国政府にそれだけ信用されてるって事？」

「いや、単に早瀬君にしか使えないってだけじゃ……」

「でも、こんな一大計画を任せられるって……」

「凄いよ、やっぱり！」

「い、いやぁ……！」

右手で照れくさそうに後頭部を掻く浩一の頬が緩（ゆる）む。

「ああ、いいなぁっ。私も早瀬君の才能欲しいなぁっ」
「才能、って言うのはちょっと違うんじゃ……」
「織斑先生とどういう関係なの？」
「ＩＳ、どれ位動かしてるの？　今度操縦教えて！」
「私、今サイン貰っちゃおうかなぁ！」

「あはははははは……！！　俺、そんなに凄いかなぁ！？　うはははははは……！！」
更なる猛アプローチで人気が上がるにつれて、浩一は有頂天になった。
先程までのぎこちなさは何処へやら。調子に乗りやすいのが、彼の悪癖である。

「……」

そんな少年の様子を目元をピクピクとさせながら不機嫌そうに眺め、

身体から紫色のオーラを立ち上らせて一夏にビビられている女子が一名。

「ね、ねえ。城崎さんって、早瀬君の知り合いなの？」

負けじと、女子生徒の一人が話しかけた。

浩一が何度も助けを求める視線を寄越していた事と、今の態度を見れば察せられる。

「え、ぁ……はい。私の父が、Ｄソイル開発の第一人者だったので、その縁で……」

「ええ！？　じゃあこのクラス、重要事項の関係者が二人もいるの！？」

「織斑君も入れて三人だよ！　彼、何もなしでＩＳ動かしたんだから！」

「私、凄いクラスに入ったわね……」

「城崎さんのお父さんってどんな人！？　やっぱり天才？　もしかして、篠ノ之博士とコネ持ってたりするの！？」

「い、いえ！　私は殆ど何も知らないんです！　なるべく問題に巻き込まれない様にと、父の仕事の事も政治的立場の事も、知らされていなくて……浩一さんも、時間があれば動かしていただけなので、詳しい知識は……」

一気に捲(ま)くし立ててきたクラスメイトの集中砲火を、城崎はわたわたと制止した。

「それに、私の家だった研究所も、浩一さんの家も、火事で焼けてしまって。父は、その時に……浩一さんのご家族も行方不明で」

一同が沈黙する中、城崎は言葉を続けた。

「機体は無事だったので、その稼働データと戦闘経験値、三年間の身元保証の為に、ここへ」

「……」

そこで浩一も押し黙った。

地球に押し寄せたのはあれだけの軍勢だ。御崎町どころか、世界中の町が間違いなく壊滅状態だろう。

それを思うと、火事で家を無くしたという嘘の経歴が本当の事の様に気持ちが沈む。

「そう、だったんだ……ごめん」

「いえ……」

「え～み～～ん」

暗いムードと場違いな、のろのろした声が響いた。
そう言いながらゆっくりと絵美に近づいてきたのは、腕よりも長い制服の袖をぶらぶらさせた、眠そうな顔をした女子生徒だった。

「え、えーみん……？　あの、あなたは……」

「私はね～、布仏本音って言うんだよ～。お昼になったら、学食でご飯一緒に食べよ～？　こーちんも～」

「こ、こーちんって……何だよ、その鶏肉みたいな名前は……」

「一夏」

「――箒？」

布仏という子の独特のペースで教室の毒気が抜かれ、クラスの雰囲気が明るい方向へと向かった事に安堵していた一夏は、そのタイミングを見計らっていたかの様に話しかけられた。

素性が知れている事もあり、この休み時間での一夏に向けられる注目の度合いは、浩一に比べて低い。
とはいえそれでも十分過ぎる位なのだが、男子禁制の空間に馴染んでいる彼女らは、Dソイルの話の様なきっかけが無いとなると声を掛ける事は難しく、”抜け駆けする気か”という緊張感が牽制の役割も果たしていた。

故に、浩一と絵美の二人が女子を幾人か引きつけていて声を掛けやすくなっていたとはいえ、彼女の行動は思い切ったものであると評価出来る。

しまった油断した、だの、知り合いなのか、だのと教室にざわめきが起こった。

「少し話をしたい。廊下でいいか？」

「お、おう」

それだけ言うと、箒と呼ばれた少女はすたすたと歩きだした。
教室外の廊下に詰め寄っていた他クラスの一年・二年・三年の女子が、さっ、とモーゼの海渡り宜しく左右に分かれて道を開く。

（あ、そうだ）

いい機会だから、あの二人も紹介しておこう。別に二人っきりで話

したい隠し事でも無いだろうし。

「城崎さん、早瀬。ちょっと一緒に来てくれよ」

「あ、はい」

「今行く！　ごめん、ちょっと通して」

ドアの向こうに遠ざかっていく絵美の姿を目で追い、浩一は周りの女子生徒達を促(うなが)して席を立とうとする。

そこへ――

「ちょっと、宜しくて？」

すぐ右上の席にいた金髪の少女が、すっ、と立ち上がった。

身長は女子として平均的だが、実家が神社兼任の剣術道場という事もあって長年鍛えて身体が引き締まっているからなのか、実際よりも高く見える。
長い黒髪を白のリボンで結(ゆ)ってポニーテールにし、日本刀の如く鋭い気配を発するその様(さま)は、正(まさ)しく侍。

それが、篠ノ之箒。

六年ぶりに再会した、一夏の幼馴染だった。

ＩＳ学園の屋上は、生徒達にも開放されている。
それだけでなく、欧州を彷彿(ほうふつ)とする石畳が敷き詰められ、供えられた花壇には季節の花々が咲き誇り、椅子も用意された円形テーブルまで完備。
その上、元が女子校だからか手入れも行き届いており、美しい憩いの場として、毎年生徒達で賑わっているのだった。

当初は一夏と廊下で話そうとした箒は、カルガモの如く後を追ってきた女子生徒達が、四メートル程離れて興味津々とばかりに聞き耳を立てているのを感じた。
邪魔されぬ様にといい場所を探し、教室や廊下といった狭所(きょうしょ)よりはマシだと、広い屋上へと来た訳なのだが。

「……お前の知り合いなのか？」

出来れば一夏と二人きりになりたかった箒は、彼の傍にいる同行者を見やった。
名は、城崎絵美と言ったか。もう一人、早瀬とかいう男子が来ていない事を知り立ち止まった一夏を「早くしろ」と急かす事になった。
不躾（ぶしつけ）な、とまで言う気はないが、そうした不満が顔や声に出ていたのか、城崎が少したじろぐ。

一方、箒の対人能力を知っている一夏は、いつもの事だ、と臆するでもなく返答した。

「ああ。千冬姉が、二人の身柄を預かる事になってさ。俺と纏めて監視するって事で、入学まで家（うち）で三人一緒だったんだ」

「そうか。お前がＩＳを動かしたのは、確か二月の中旬だったな」
ＩＳ界における彼女の立場と、先程聞いた二人の経歴を考えれば、その経緯も分からなくはない。

「――っ！」

そこまで考えて、箒は衝撃を受けた。
”家（うち）で三人一緒だった”だと？　早瀬を入れて、千冬さんを含めずにそう言ったのか？
という事は、織斑一夏と、城崎絵美は――

（い、一ヶ月以上同棲……！！　いや、早瀬がいたから同居か――
――していたという事かっ！？）

篠ノ之箒　ＬＰ　３０００

箒が内心で慌てふためいているのを知る由もない一夏が、城崎に紹介する。

「話したよな。こいつが、篠ノ之箒」

「篠ノ之さんの事は、伺っています」

綺麗に礼をした城崎は、友好的（フレンドリー）に取れる笑みを浮かべた。

「一夏さんの、昔のお友達ですね。宜しくお願いします」

「なっ――！？」

何の裏表も無く言った城崎の撃滅的な言葉に、箒は大いに動揺した。

篠ノ之箒　ＬＰ　０

――む、昔の友達だと！？

――何だその言い方は！？　お前と一夏は、どの様な関係なのだ！？

――それに『一夏さん』だと！？　いや、まて、落ち着け。知り合って一ヶ月ならば、何も不自然は無い……！

「篠ノ之さん……？」

落ち着きが無くなり始めた箒を城崎が奇妙に思っていると、一夏が補足説明をした。

「友達っていうか、幼馴染だよ。小一からの」

一夏と箒の出会いは、千冬がＩＳ開発者である篠ノ之束と交流がある縁で、姉に付き合わされる形で通う事になった剣道場での事になる。

その後、彼女が引っ越す事になった小学四年生まで同じクラスだった。

とはいえ、その交流期間に比例して良好な関係だったかと言えば、そうではない。

寧(むし)ろ逆に悪かった。

本人曰く”生まれつきだ”という、反抗的な第一印象を与えてしまう、不機嫌そうに釣り上がった目。

人一倍、頑固一徹な性格。

それらが融和していっそ見事なまでに愛想が悪く、幼い頃の一夏は生意気だと馬が合わずに何度も衝突して試合となり、その度に瞬殺されて負けた悔しさを燻(くすぶ)らせていた。

それでも、同じ剣の道を歩んできた成果か、あるいは逆に圧勝するまでになった努力を認めてくれたのか、次第に打ち解けていった――

――様な気がする。

当時、篠ノ之夫妻にはよく夕食を御馳走になっていて、あの頃はまだ貧乏だったから大いに助かっていた――と思う。

（あんまり覚えてないんだよな、昔の事……）

一夏は、幼い頃の記憶が曖昧だった。

「い、一夏ッ！！」

「おうっ！？」

物思いに耽(ふけ)っていた所へ怒鳴られ、思わず声が上ずる一夏。そこへ箒が勢いに任せてまくし立ててくる。

「お、お前と城崎さんはどういう関係なのだ！」

「どうって言われてもな……」

千冬姉から紹介されて、早瀬と一緒に三人で暮らす事になって、親しくなって一緒にＩＳ学園へ入学した。

それ以外の何があるんだ？　別にどこも特別じゃないぞ。

「だ、大体、同じ屋根の下で一ヶ月も共に暮らすなど、不埒だろう！　男女七歳にして同衾せず！　常識だ！」

「どうき……」

正直、呆れた。いつの時代の常識だよ……って！

「はぁ！？　んな事するか馬鹿！」

「そうですよ！　一夏さんは布団で寝て、私に自分のベッドを貸してくれたんです！」

「――――――――――――――――――――ッッッッ！！」

僅かに顔を赤くした二人の言に、箒の平常心は抹殺された。

篠ノ之箒　ＬＰ　０

「べ、べべ、ベッド……一夏のベッド、を……
……」

顔を青ざめさせて、わなわなと口元を震わせながら数歩後ずさる箒。
ぶつぶつと漏らす独り言は声量が小さく、一夏と城崎には聞こえていない。

「あ、あの……？」

「ま……まぁ、良かったよ」

「――――ッッ！！」

キッ、と眦（まなじり）を険しくした箒が、胸倉を掴み掛（かか）らんばかりの勢いで一夏に詰め寄った。

「良かった！？　良かっただと！？　今の何が良かったというのだお前は！！」

城崎が止めようとする間も無く、落ち着け、と一夏が平手を前に翳（かざ）してバリケードを作る。

「いや、お前が元気そうでさ」

「――！」

箒の顔に赤みが差した。この言葉をようやく言えた一夏が、人懐っこい笑みを浮かべる。

「久しぶり。箒だってすぐに分かったぞ。髪型、同じだしな」

「よ、よく、覚えているものだな……」

箒の言葉が、徐々に尻すぼみになった。右手で長いポニーテールの

結び目を掴み、その端(はし)を指先で弄(いじ)り始める。

「そりゃ忘れないだろ」

「そ、そうか！　忘れないか……そうかそうか……」

（ん？）

一夏には、箒の笑い顔が締まりがなく緩(ゆる)んでいる様に見えた。
何かこいつらしくないな、と、内心で思っても流石に口に出す事はせず、言葉を続ける。

「幼馴染の顔くらい」

「……」

（むっ……）

「……あれ？」

な、何で急に空気が悪くなったんだ？

何でギロリ、と睨んでくるんだ箒。城崎さんまで視線がキツいし……

「一夏さんは、女の子の気持ちが理解出来ないみたいですね」

うわあ、口調まで冷たくなった。『最低です』が来ないだけマシだけどさ……俺は未体験だけど、早瀬が言われてるの見るだけでも堪えるんだよな……

（あー……）

どうしたものか、と苦心した一夏は、ふと思い出した事でこの険悪なムードを解決しようと試みる。

「新聞で見たぞ。去年、剣道の全国大会で優勝したんだろ。おめでとう」

「……な、何で新聞など見ているんだ……」

（あれ？）

嬉しくない……のか？　何でだよ。剣道、あれだけ真剣に頑張ってたじゃないか。

再会したばかりの幼馴染が落ち込むのを見るのが嫌で、一夏は次の話題を出した。

「その……引っ越してからそれっきりだったけどさ。親父さん、元気か？　束さんも……」

「あの人は……！！」

語気を強めた箒が、右手で左腕をぎゅっ、と握りしめる。
その顔に浮かんでいるのは、嫌悪や怨恨といった負の感情だった。

「あの人は……私とは、関係ない……！」

「篠ノ之さん……」

「……箒？　束さんと、何かあったのか……？」

「――時間だ。戻るぞ」

二人は、回答を得られなかった。
休み時間終了のチャイムが鳴る中、背を向けた箒が校舎の中へと引き返していく。

反ば呆然とする二人の内、先に口を開いたのは城崎だった。

「あの人……篠ノ之博士と、仲が悪いのですか？」

「……そう言えば、一緒にいる所みた事無いな。束さんの話を出すと、いつもそこで会話が終わってた」

「……そうですか……」

「……」

一夏は、どこか神妙な顔つきになる城崎の横顔をちらり、と見つめた。

彼女は、家を失った時、実父だけでなく実兄も共に亡くしたと聞いている。

彼は仕事の方向性で昔から父と対立しており、しばらく親元を離れていたのだが、家族仲自体は悪くなかった。

互いの関係を修復しようと帰って来た所に、火事に巻き込まれたのだという。

存命でありながら不仲な姉妹に、何かしら思う所があるのだろう。

「……俺達も戻ろう、城崎さん」

「はい」

分かり合う前に死に別れてしまった家族。険悪な関係の姉妹。
それに虚心でいられないのは、姉が特別な存在である一夏も同じだった。

「――決闘ですわッッ！！」

そう甲高い声が聞こえてきたのは、三人が気まずさを引きずって無言で一年一組の教室へ戻る途中、そのドアが見えてきた時だった。
どうも、新学期早々面白くない事態が起こっているらしい。

「何だ？　喧嘩か？」

そう一夏が呟いた時だった。

「上等だッッ！！」

――あの声は、浩一！？

「っ！」

一夏が認識した時には、城崎が我先にと駆け出していた。一夏の後を箒が遅れて続く。

「お前みたいな、力の使い方が分かってない勘違い女なんか……！！」

三人の前でドアが開いた時には――

「――――五分で倒してやる！！」

――雄雄しき眼をした少年が、そう吼えていた。

第０８話　クラスメイトは殆ど女（後書き）

本作でのＩＳ学園教室及び屋上のデザインは、原作の物を使用しています。

今回は小ネタを幾つか挟(はさ)ませて頂きました。ちなみに、浩一と絵美のＩＳ学園制服デザインは以下の様になります。

浩一＝一夏・シャルルと同じだが、上着はベルトで留める事はせず開(はだ)けており、ワイシャツが見えている。ズボンのベルトは先をぶら下げており、黒いネクタイに待機状態のラインバレルが留められている。靴は黒いローファー。

絵美＝箒と同じだがスカートの丈が少し長く、黒いニーソックスを着用。靴は黒いローファー。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8410s/

鉄のストラトス

2011年12月10日02時47分発行